「弾力性と爆発力をもって」

香登教会　坪内信治

新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるべきである。そうすれば両方とも長もちがするであろう。
マタイ9・17

教会学校の低迷が言われて長くなります。教会学校に子どもたちが集い、救われることは私たちの何よりの願いです。この時代の変化の中で求められるものは何でしょうか。

1．弾力性　パレスチナではブドウ酒を皮袋に入れました。新しいものは弾力性がありましたが、古くなると硬化し使い物にならなくなります。教会学校の働きにもこの弾力性が必要です。子どもたちをとりまく環境もここ十数年大きく変わりつつあります。その時代の変化にともない、子どもたちへのアプローチも柔らかく変化する必要があります。教会学校の始まる時間、あり方、内容、場所、プラグラム、地域の子どもたちへの宣教方法、部活動や習い事に忙しい子どもたちへのアプローチ、大人の礼拝中の子どもたちのあり方、クリスチャンホームの子どもたちへの信仰継承、大人との合同礼拝の必要、地域の子どもたちの課題に応える必要、さらには教会の中における教会学校の位置づけなど、とりくむ問題は多くあると思いますが、新たに柔らかく考える必要があるのではないでしょうか。主は私たちに弾力性のある発想を与えられるでしょう。私たちの教会学校が硬化し、使い物にならないものではなく、新しい皮袋を用意し、弾力性のある教会を建ち上げていきたいものです。

2．爆発力　新しいぶどう酒には、発酵する力、何よりも内側からあふれる命があります。それがまさしく福音の力です。十字架にかかり死んでよみがえられた主は私たちの内に住み、豊かな創造力、そうせずにはおられないという内からあふれる力を与えてくださるのです。それは変えてはいけない、私たちが受け継いだ宝です。

弾力性をもって、この時代に適した教会学校、子どもたちへ宣教のあり方を検討し、また聖霊による力をもって子どもたちの救いと教会学校のために祈り、奉仕させていただきたいと思います。

牧羊者

目次

巻頭言 …… 1
目次 …… 2
教師養成講座「教会学校教師として大切にし続けること」 …… 3
イスラエルの指導者≪10／1～10／8≫ …… 7
キリストの譬話≪10／15～11／19≫ …… 19
クリスマス≪11／26～12／24≫ …… 55
年末年始≪12／31≫ …… 85
牧羊ひろば（名古屋教会） …… 91
カリキュラム …… 97
「牧羊者」のご購読・ご利用について …… 98
おわりに …… 98

〔凡例〕

1．原語について…ギリシャ語は〔ギ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。

2．礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
こ…「こどもさんびか」、こ改…「こどもさんびか改訂版」（以上、日本キリスト教団出版局）、ホ…「教会学校・日曜学校　子どもさんびか」（日本ホーリネス教団出版局）、イン…「教会学校さんびか」（インマヌエル教会学校部）、ふ…「ふくいん子どもさんびか」、GS…「ふくいんこどもさんびか２　グローイング・ソング」（以上、日本児童福音伝道協会）、PW…「プレイズワールド」（リビングプレイズ）

教会学校教師として大切にし続けること

幌向小羊教会　飯田勝彦

日頃、牧師をはじめ教会学校の先生方が祈りつつ様々なアイディアを駆使して子ども伝道の働きに従事しておられることと思います。少しでも子どもたちが楽しめるプログラムや、子ども伝道が前進する方法などにアンテナをはり、真摯（しんし）に学び続けておられることでしょう。子どもを愛され招かれるイエス様が、先生方の情熱と働きをどれほど喜んでおられることでしょうか。

筆者は宣教局子ども伝道に携わるなかで４・14窓運動を知りました。イエス様を救い主として受けいれた人たちを調査したところ、４歳～14歳までの期間にイエス様を受け入れた人が多いという結果がでました。この結果から、４歳～14歳世代に焦点をあわせて伝道して行こうという運動です。

昨年行われた第６回伝道会議の中で「子ども伝道プロジェクト」に参加しました。会場には100人を超える方々が集っており、子ども伝道の関心の高さを痛感しました。その場で参加者がいつイエス様を受け入れたか質問されました。すると、参加者の大半がやはり４歳～14歳の期間にイエス様を受け入れていたのです。心が柔らかく純粋な時期に素晴らしいイエス様を伝えていくことの大切さを確認しました。

子ども伝道の大切さが叫ばれる中で、教会学校教師として大切にし続けることを一緒に考えて見ましょう。

一、教師として任命された自覚

夫婦に子どもが与えられると「親」となります。しか

し、立場が「親」であっても「親」としての自覚がなければどのようなことが起こるでしょうか。それは子どもにとって悲劇です。

教会学校教師は、年度初めに教会学校教師任命式が行われます。

式文の誓約には「あなた（がた）は、今この教会（日曜）学校の校長（教師）に任じられ、み言葉の宣教と信仰の教育に当たろうとしています。この務めは主イエス・キリストの召しによるものであります。それゆえに、あなた（がた）は、御霊の力をいただき、忠実に励まなければなりません。今、あなた（がた）は、この務めにつくにあたり、これが神の召しであることを確信しますか。あなた（がた）は、ゆだねられたひとりびとりの魂のために祈り、全力を注いで奉仕するように努めますか」とたずねられます。

この誓約に対して教会学校教師は「神と会衆の前において約束します」と約束し、教師に任命されています。大切なことは主の任命を受けて教師とされていることです。主が教師に求められるのは忠実、召しの確信、祈り、全力を注いでの奉仕です。

いくら子ども伝道の方法などを取り入れても、教師としての自覚がなければ本末転倒です。教会学校教師は片手間にできるものではありません。次の世代を担う純粋な魂に向き合う真剣勝負の奉仕です。そのためには教会学校教師として主が召し出して下さった自覚を持ち続けることは大切です。自覚とともに責任感が湧いてきます。責任感があれば、教会学校に対する重荷があたえられます。

現在、教会学校や子ども伝道の働き、そして子どもたちの霊的な課題をどのように感じておられるでしょうか。奉仕者不足、子どもが集まらない、ある時期になると教会から離れてしまう等など。具体的に挙げられるでしょう。実際、そのような課題を牧師や教会学校教師で共有されておられるでしょうか。

教会学校の働きはチームとしての働きです。どんな小さなことでも共有し、結論がでなくても話題にすることを習慣にしておきましょう。教師として互いに情報共有し、また互いが主にあって召された者であることを確認しながら励まし合って取り組みましょう。

二、主を喜び続ける

ジョージ・ミューラーは「私が毎日、いちばんはじめに行い、いちばん大切にしようと心がけていることは、自分のたましいを主を喜ぶ状態にすることです。いちばんの関心事は、どれほど主に仕えるかでも、どれほど主の栄光を現すかでもなく、どうやって自分のたましいを主を喜ぶ状態にし、どうやって私の内なる人が養われるかです」（ポケット・ディボーション・シリーズ「ジョージ・ミューラー信仰」いのちのことば社）と記しています。

宣教の最前線でもある教会学校及び子ども伝道に携わるためには、教師自身が常に主を喜ぶ状態とされていることが不可欠ではないでしょうか。気を付けないと、奉仕のための聖書朗読、またメッセージのための学びとなりがちで、自分自身の霊性が養われることが後回しになってしまいます。

子どもたちは教師の無意識から発せられる言葉、態度、表情を敏感に察知するでしょう。ですから、まず子ども達に語る前に、また子ども達に接する前に日頃から自分自身の霊性に関心を持ち、ケアし主を喜ぶ状態にすることは重要です。ネヘミヤ8・10に「主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である」（新共同訳）とあります。そこにかく主を喜んでいるなら奉仕の力が与えられ、そこに聖霊が働いてくださいます。ジョージ・ミューラーは続けます。「私にとっていちばん大切なことは、まず聖書を読み、黙想に自分をささげることです。そうすることによって私のたましいは慰められ、強められ、警告を受け、罪を知らされ、教えられます。そして、神のことばを黙想しているうちに、私の心は主との交わりを経験するのです」と。

三、恵みの下に留（とど）まり続ける

ローマ6・14に「なぜなら、あなたがたは律法の下にあるのではなく、恵みの下にあるので、罪に支配されることはないからである」、ヨハネ1・14には「そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまこととに満ちていた」とあります。注目したいことは、私たちはすでに「恵みの下にある」ということです。神の掟である律法を守り切ることので

きない私たちは神の前では罪とされ神の怒りを受けるべき者でした。しかし、「めぐみとまこと」に満ちたイエス・キリストは神の律法をすべて守られました。そのイエス・キリストの内に招かれた私たちは、キリストにあって神の前には義とされるという、恵みの下にいるのです。

しかし、恵みの下にいる者がいつの間にか律法主義的になりやすい弱さがあります。一生懸命であればあるほど「〜すべき」、「〜でなければならない」となってしまいます。そうなると、子どもを見る見方や接し方、メッセージの中にそれがにじみ出て、子ども達を窮屈にしてしまうことがあります。

ですから、教師が「恵みの下にいる」ことを自らが体験し、そこに生かされて行くことが大切ではないでしょうか。恵みは魂を潤し、活かします。いや恵みだけが魂に神への愛を回復させるのです。教師が常に恵まれていましょう。

四、愛のつながりを保ち続ける雰囲気

教会が提供できる恵みの一つに「愛のつながり」があるのではないでしょうか。最近ではメールやライン、フェイスブックなどで「つながる」ことは得意としています。しかし、現実はそのつながりの中で傷つき疲れている者たちもいます。子どもたちも同様です。ですから、子どもたちも真実な愛のつながりを求めて教会に来るのではないでしょうか。互いに愛され、愛する関係の中でこそ人は慰められ、癒(いや)され、本来の人間性を回復していくのです。そのために、教会学校教師は自ら神の愛に育まれ、教師同士で愛のつながりを深め、そのつながりの素晴らしさを体験していることが大切ではないでしょうか。

教会学校の子どもたちが聖書から語られる愛のメッセージを聞くだけでなく、教師同士の愛のつながりを通して実際的な愛を体験することができます。

教会学校教師の存在は、子どもたちにとって神の愛と恵みを目の当たりにする視覚教材です。教師の全人格が主にあって恵まれ、喜んで子どもたちに関わるなら、聖霊は教師を通して働いてくださいます。

課題の多い教会学校の働きですが、主のための労は決して無駄にならないことを信じましょう。

聖　書　士師6・7～16
テーマ　ギデオンの召命

（高橋頼男）

序論

イスラエルがカナンに進入してから王制が出来るまでの約二百年間が士師記の時代です。当時、各部族はゆるやかな連合制の中でそれぞれ独立したあり方を取っていたため、強力な外敵の攻撃に対しては弱く、しばしば侵略を受けました。それは彼らが偶像礼拝を行って霊的に堕落したときに起こりました。圧迫された民が神に叫び求めた時、神は「士師」と呼ばれる解放者を起こし、イスラエルを救い出されました。士師記に登場する十二人の士師の中で、ギデオンは五番目の士師です。

当時、イスラエルを圧迫したのはミデアン人とアマレク人でした。遊牧民である彼らは、毎年収穫の時期になると、いなごの大群のように大挙してイスラエルを襲い、地の産物を根こそぎ奪っていきました。そんなことが七年も続き、全く疲弊（ひへい）して弱ってしまったイスラエルの民は、こらえきれず主に叫び求めます。そんな状況の中で神が救済者、解放者として選ばれたのがギデオンです。

一、臆病者の士師（11～13）

主の使が来てヨアシの子ギデオンに呼びかけられた時、彼はミデアン人の目を避けて酒ぶねの中で麦を打っていました。主の使は〈大勇士よ、主はあなたと共におられます〉と言いましたが、この言葉は、ギデオンにとっては何か悪い冗談か皮肉のように聞こえました。彼は、自分はマナセの内で一番小さい氏族であり、自分も弱く父の家でも若いものであることを、くどくどと言っています。そんな自分がなぜ〈勇士〉と呼ばれ、〈あなたはこのあなたの力をもって行って、ミデアンびとの手からイスラエルを救い出しなさい〉と言われるのか、彼は本当にとまどってしまいました。

二、臆病者を用いられる神（14）

しかし、このように全く臆病で消極的な人であったギデオンを、主の使はあくまでも〈大勇士〉と呼びます。神の戦いは神の方法でなされ、神はご自身の栄光が現される方法を用いられます。神は、自信満々の人間、知恵と能力のある者や、自分の力を誇る者を用いられることはありません。むしろ、弱く、小さく、取るに足らない者をあえて選び、召し、用いられるお方です。「これは

権勢によらず、能力によらず、わたしの霊によるのである」（ゼカリヤ4・6）。弱く、小さく、力のない臆病者のギデオンこそ、イスラエルを救うための神の選びの器でした（Ｉコリント1・26～31参照）。

私たちも、強気の言葉や態度とはうらはらに、本当の自分の姿を見せられ、無力感や不信、自己の醜さに打ちのめされることがあります。日本の教会もまことに小さく、力の無いものであることを思わされます。異教や異端ばかりが跋扈（ばっこ）し、この世の勢力や組織がすべてを支配しているかのような現実から、キリスト教会は隠れて存在し、かろうじて日々の生活と働きを継続しているように感じてしまうのです。私たちの祈りも信仰も臆病なものになっていないでしょうか。何か言われると、自分に能力がないこと、小さく弱いことを言い訳にしていないでしょうか。しかし、いつもそこに留（とど）まって、神のお言葉と召しに従わないことこそ、私たちの最大の問題なのです。今一度、本気で主を求め、全面降伏・全面信頼し、上からの新しい注ぎを受けるべきではないでしょうか。

三、臆病者を大勇士に変える神（14～16）

ギデオンを選び、救済者として召された神は、臆病者を大勇士に変える力を持っておられます。主が選び、召し、共にいてくださり、つかわしてくださるのです。〈わたしがあなたと共におる〉〈わたしがあなたをつかわす〉と主は繰り返し語られます。もし、そうならば、これに勝る力、勇気、祝福はありません。

「あなたはヨハネの子シモンである。あなたをケパ（訳せば、ペテロ）と呼ぶことにする」（ヨハネ1・42）。直情的で不安定、欠点の多いシモンにイエスは目を留め、そのようなあなたをわたしは「ペテロ」（不動の大岩）とすると言われました。生まれつきのシモンと、後の大使徒ペテロとのギャップはとても大きなものです。しかし、その狭間を埋めて実質を持つ「ペテロ」としてくださるのは、イエス様なのです。

私たちも今日、主が共におられるという事実を受け入れ、主が、弱く臆しやすい私たちを造り変えて下さることを信じ、臆病者から勇士に変えられましょう。

結論

弱いところを強くされ、疑いを確信に変えて頂きましょう。大胆な信仰に立って神に従い、神の方法によって圧倒的多数に対しても完全に勝利する者とされましょう。

研究資料

（宮澤清志）

テキスト

7　ミデアンびと　アブラハムとケトラとの間に生まれた第４子（創世記25・２）。その後、この民族は聖書に度々登場するが（創世記37・25〜、民数記22、25章）、一旦はモーセに滅ぼされる（民数記31・１〜20）。ミデアンびとの最大の特徴は、彼らのバアル礼拝である。

８　預言者（〔ヘ〕イーシュ・ナーヴィ）　直訳すると「預言者であるひとりの男性（人間）」。士師（さばきづかさ）の時代に預言者が登場することは珍しいことであり、士師記においてはイスラエルが主に呼ばわると、その時点で士師が遣わされる（３・９、15）。しかしここではその前段階として預言者が遣わされる。この預言者の任務はイスラエルの民にその罪を示すことと、彼らに悔い改めを命じることであった（10）。

11　主の使　この言葉は、旧約の神顕現（けんげん）の重要な個所によく用いられている言葉である（創世記16・７以下、22・11、15、出エジプト３・２、民数記22・22、列王上19・７、イザヤ37・36、ゼカリヤ１・11〜12他）。また士師記においてもこの言葉はしばしば登場する（２・４、５・23、13章）。もちろんギデオンの物語だけでもしばしばみられる（11、12、21、22節）。これらの個所を見ると、この主の使は神と人間の間を仲介する役割を果たしているのであろうと考えられるが、それが預言者的な役割であったか、それとも祭司的な役割であったか明らかではない。この、主の使について、受肉前のイエス・キリストであると考える立場もある。ギデオンはこの使を、はじめ普通の人ととらえたが、この使が見えなくなってから、この方が主の使であることを知った（21、22）。**アビエゼルびととヨアシ**　アビエゼルびととは、マナセの一氏族（15節。またヨシュア17・２参照）。アビエゼルとは「父（神）は助けである」という意味である。またヨアシは「ヤーウェは与えたもう」という意味である。**オフラ**エスドラエロン平原の中部に位置する。**テレビンの木**新改訳聖書では「樫の木」。伝統的に聖なる木であるとされ、神の託宣が与えられるとされる木であった（創世記18・１以下）。**時にヨアシの子ギデオンはミデアンびとの目を避けるために酒ぶねの中で麦を打っていた**　ミデアン人は、イスラエル人が苦労して栽培・収穫した農

作物を狙って、その収穫期にイスラエルを襲った。そのミデアンの侵略から逃れるために、ギデオンは酒ぶねの中で小麦を打っていたようである。酒ぶねは、岩床に掘り起こされた穴で、ギデオンはその穴の中に隠れていた。

12 大勇士（ヘ ギッボール・ハイル） ギッボールもハイルもともに「勇者」という意味。そこで、「大勇士」となったのであろう。**主はあなたと共におられます** 主の臨在の約束。ヨシュアにも（ヨシュア1・5、9）、またアサ王にも（歴代下15・2）臨んだ。

13 前節の主の使の言葉に対するギデオンの反応は、当然のことのように思われる。主は彼らを見捨てたのではないか、また主の力あるわざは昔のものであって、現在のことではないのではないかという不満である。この不満は明らかに同時代の人々も抱いていた不満であろう。

14 あなたの力 主は「わたしの力」とはおっしゃらず、「（わたしが与えた）あなたの力」と仰せになった。主の力は既にギデオンに与えられていたのである。その上で、主はギデオンを遣わそうとされたのである。同時に前節のギデオンの問いに対して主は **あなたは…救い出しなさい。わたしがあなたをつかわす** と語られた。前節の問いを解く鍵はギデオンにあるのである。同時にこの言葉は主の召命の確認の言葉でもある。

15 主よ 13節の「君よ」という呼びかけから明らかに変化している。「わたしの主よ」（新共同訳）。**最も小さいもの** 一番若い者という意。自分の家の地位の低さや年齢の若さなどによって主の申し出を断る姿はモーセ（出エジプト3・11、4・10）、サウル（サムエル上9・21）、エレミヤ（エレミヤ1・6）にも見られる。

16 わたしがあなたと共におる 12節の主の臨在の約束の再確認。この言葉は、14節の言葉と共に、主が「派遣の主」であると同時に「臨在の主」であることをも表す。この言葉はマタイ28・18～20にも約束されている言葉であり、古今東西を問わず主の弟子たちに与えられている、これ以上ない約束である。

参考図書 アーサー・E・カンダル、レオン・モリス共著「ティンデル聖書注解 士師記、ルツ記」（いのちのことば社）他

1日 礼拝メッセージ例

聖　書　士師6・7～16
タイトル　弱虫なのに「大勇士」？
暗唱聖句　大勇士よ、主はあなたと共におられます。　士師6・12
目　標　どんな人をも働きに用いようとしてくださる神の招きにお応えする。

（和田　治）

導入

「どうせ弱虫な僕なんて、私なんて、神様のお役にたてるような力なんかない、ダメな子さ…」。皆さんの中に、そんなふうに思っている人はいますか？　実は、今日のお話でスポットが当たるのは、まさしく、「どうせぼくなんて…」って思っているタイプの人なんです。その名はギデオン。彼を見ると、神様は、弱い人をこそお用いになるのだ、っていうことがよくわかりますよ！

弱虫ギデオン

今読んだ聖書の個所は「士師記」ですね。士師というのは「さばきつかさ」とも言って、人々を救うために神様がお用いになったリーダーです。十二人の士師のうち五番目に立てられたのがギデオンでした。当時、ミデヤン人は、イスラエル人が苦労して育てた農作物を狙って、襲いかかり、奪っていくのでした。そんなときギデオンは、敵であるミデアン人と戦って皆を守るどころか、彼らの目を避けて酒ぶねの中で、こそこそびくびく、麦を打っていたのです。う～ん、怖がりで弱虫ですね。

そんなある日、主の使いが現れ、ギデオンに言いました。「大勇士よ、主はあなたと共におられます。イスラエルを救い出しなさい！」勇士っていうのは、勇気のある人という意味です。「大勇士？　イスラエルを救う？　とんでもない！　無理です！　私の家は、マナセ族の中でも一番弱いし、それに私は、家で一番年下なんです」。そんな自分になぜ「イスラエルを救い出しなさい」なんて言われるのか、ギデオンにはさっぱりわかりません。「はい！」と従うどころか、恐れてぶつぶつ文句を言うばかり…。

弱虫をお用いになる神様

「ギ～デオ～ン…私を信頼せずつぶやくばかりとは情けない。なんて弱虫だ。もうお前なんかには頼まない！」、主の使いはそうは言いませんでした。だって、主なる神様は、ギデオンの弱さをよ～く知っておられた上で、彼をお選びになったんですから。「あなたは、わたし

が与えたあなたの力をもって行きなさい。わたしがあなたをつかわすのだ！」そうです、ギデオンの力ではなく、神様の力でこそ、イスラエルを救い出せるのですね。

「僕に任せてくれ！ 立派にやって見せる！」、「私なら大丈夫！ 自信があるの。神様の力なんかいりません！」な〜んていう自信満々の人間を、神様はお用いにはならないのです。むしろ、弱く、小さく、取るに足らない人をあえて選び、お用いになるのです。

なぜって？ それはね、人は自分の弱さを知っていると、「神様、どうかお助け下さい！」って、神様に頼るでしょう!? それでこそ、神様はその人を自由に用いて、ご自身のわざを進めることがおできになるのですね。やがて、ギデオンの軍隊は、ミデアン人に比べるとあまりにも数が少なかったのに、見事に敵をやっつけたのです。もちろん、神様の不思議な、そして大きな力によって！

恐れることはない！

ギデオンが恐れて尻込みしているとき、主は彼にこうおっしゃいました。「わたしはあなたと共にいる！ だから、あなたはひとりを撃つようにミデアン人を撃つことができる！」ギデオンのように、私たちも、弱くて小さくて、何もできないかもしれません。でも、忘れないで！ 私たちには神様がついてるんです。だから、恐れなくていいんですね。神様はどんな人でもそのお働きのために用いることができるお方なのです。

ペテロやパウロ、そして私たちも

ギデオンのように、神様に用いられそうもないのに用いられた人たちは、他にもいましたよね。例えば、ペテロはイエス様から、ある時こう言われました。「あなたはヨハネの子シモンである。あなたをペテロと呼ぶ」。シモンは「小石」っていう意味です。すぐにかっとしたり弱虫で、イエス様を裏切ってしまうようなペテロに、「小石のようなあなたを、わたしが『ペテロ（揺るがない大きな岩）』とする」と仰りその通りになさいました。また、パウロもかつてはクリスチャンたちを捕えて牢屋に入れるような人だったのに、神様の力で全く変えられ、神様のために大いに用いられました。そうです！ 彼らと共におられた神様は、同じように私たちともいつも共におられ、私たちを強め、お用いくださるのです。だから恐れず、神様を信頼し、神様に自分を献げ、従いましょう！

♪雄々しくあれ♪（新聖歌486、ホ106、イン77他）

聖書　士師16・4〜6、15〜22
テーマ　サムソン

序論

（石田高保）

反面教師とか他山の石という言葉がありますが、サムソンはさしずめクリスチャンにとってそういう存在でしょう。彼の生きた時代、イスラエルはペリシテの侵略を受けましたが、それに対してほとんど抵抗を示さず、その支配を甘んじて受けていました。そこで神はペリシテに断固抵抗する指導者を起こそうとされます。彼の生まれる前、両親に主の使が現れ、生まれる子はペリシテからイスラエルを救い出す者となると宣告しました（13・5）。やがて成長して、彼に主の霊が降り、並はずれた力でペリシテ人を圧迫するようになり、20年にわたってイスラエルのさばきびと・士師として活躍しました（31）。

一、力任せによる失敗

彼の前半生は、まさに怖いものなしでした。主の霊が臨み、並はずれた力を授かりました。彼はそれをペリシテ人を一人でも多く殺害することに用いました。

ある時からサムソンはデリラというペリシテの女に熱を上げてその家に入り浸っていました。それを知ったペリシテの君たちは高額の報酬を提示してデリラからサムソンの弱点を聞き出そうとします。サムソンは三度も煙に巻こうとしましたが、せがまれるうちに根負けし、ついに本当のことをしゃべってしまいます。〈もし髪をそり落されたなら、わたしの力は去って弱くなり、他の人のようになるでしょう〉。というのも彼はナジル人として生涯髪の毛をそらないという誓願を立てていたからです。そこでデリラは人を呼んでサムソンの髪の毛をそり落とさせたところ、神の霊による怪力は彼を去ってしまいます。情に負けてわが身に破滅を招きました。

主を受け入れた人は誰でも聖霊の賜物をいただいており、優劣はありませんが、それは神と人とによりよく仕えるために用いられるべきものです。得意な奉仕の分野だからといって自分を喜ばせようとして、力任せに行うなら、周りの人との関係を損なったり、後味の悪いものになったりするかもしれません。自分の能力や知識に頼るのではなく、聖霊に満たされることを求めつつ、謙遜に奉仕したいものです。

二、悔い改めによる回復

ついにサムソンはペリシテの手に陥り、両眼をえぐられ、獄屋の中でうすを引かされる羽目になります。彼の生涯で初めて経験する挫折です。サムソンは人生のどん底で考えました。なぜここまで落ちてしまったのか、自分の何がいけなかったのかと。本質的なことは力の源である髪の毛を切られたこと、突きつめれば神との関係をなおざりにしていたことに思い至ります。そこで彼は深く悔い改め、神との関係を回復したと思われます。

時を同じくして髪の毛も再び伸び始め、かつての千人力が全身にみなぎるのを感じました。反攻反転のときが訪れたのです。折しもダゴンの祭りで大勢のペリシテ人の前へ余興に出されたサムソンは、彼らを倒す好機と見て祈ります。〈ああ、神よ、どうぞもう一度、わたしを強くして、わたしの二つの目の一つのためにでもペリシテびとにあだを報いさせてください〉。そして両手で石柱を押し倒すと神殿は崩壊し、ついに三千人のペリシテ人を道連れにして果てます。〈サムソンが死ぬときに殺したものは、生きているときに殺したものよりも多かった〉と、その士師としての功績がたたえられています。

彼の生涯には神への不従順が目につきますが、まいたものを刈り取る中で不従順を悔い改め、神との交わりを回復しています。このようにどれほど行状が芳しくなくても、ひとたび悔い改めるならば、神はただちに100パーセント赦(ゆる)し、何事もなかった者として下さいます。あまりにひどい罪を犯してしまったので、神に赦していただけないと思うことがあっても、十字架による完全な赦しを信じて悔い改めたい。それとともに神が赦して下さった自分を赦すことも忘れないようにしたいものです。

彼はおおむね神に不従順な人生を送ったにもかかわらず、新約聖書では信仰の勇者としてたたえられています（ヘブル11・32）。新約の倫理観から見れば、彼の生き方には理解に苦しむところが少なくありません。それでも彼はイスラエルを侵略者から救い始めた英雄であり、神に選ばれた器であることには違いありません。

結論

何度同じ過ちを犯したからといって神の選びは変わらず、神に見捨てられることもなく、赦しの道は常に用意されています。しかしそれに甘んじることなく、神とのコミュニケーションを大切にしてゆきましょう。

（宮澤清志）

研究資料

テキスト

4～5　デリラ　「思わせぶりをする」という意味の名。ペリシテ人であった。しかし、この名の由来だけを見てデリラに対する偏見を抱くのは早計である。なぜなら今回のサムソンとデリラの物語の背後には、当時その地方に勢力を持っていたペリシテの君たちの策略があったからである（後述）。**ペリシテびとの君たち**　ペリシテ人には5人の領主がいた（サムエル上6・4）と考えられるから、ここでも5人いたのであろう。すると、デリラへの報酬としておのおの銀一一〇〇枚とすると、全部で五五〇〇枚ということになる。この額を今日の貨幣価値に換算すると、注解者によって多少の幅はあるものの、おおよそ250～300万円くらいの額とされている。かなりの高額である。**説きすすめて**　「言いくるめて」（新共同訳）。この言葉にペリシテの領主たちの策略がうかがえる。

15～22　サムソンがその力の秘密を打ち明けた経緯が記されている。

15　あなたの心がわたしを離れている　直訳すると「あなたの心はわたしとともにない」となる。これまでのデリラの言葉（10、13）とは明らかに異なる言葉。デリラの焦りと怒りが透けて見える。**三度も**　一度目（7～9）、二度目（10～12）、三度目（13～14）。

16　毎日　どのくらいの日数が経過したかは明らかではないが、かなりの日数が経過したと考えられる。その間、毎日前節の殺し文句をもって責め立てられたサムソンは、死ぬほど悩んだ。

17　ここに人間の弱さを見ることができる。サムソンは既に同じ過ちをティムナの女の一件でもしていた（士師14・16～18）。この時も、サムソンは思わずその秘密を打ち明けてしまったのである。前の過ちを繰り返さないように注意していても、同じ過ちを繰り返してしまったのである。**ナジルびと**　「聖別された者」という意味を持つ。イスラエル人の中で、特別な宗教儀式（誓願）を守って献身し、ヤハウェに対する信仰を表明した人々を指す。それは一時的献身の場合もあれば、生涯にわたる献身の場合もある。サムソンは後者である。具体的な守るべき律法は、民数記6章に記述されている。**かみそりを当て**

たことがありません　ナジル人が守るべき律法の一つ。古代において「毛髪」は不思議な力の宿るところとされた。毛髪の成長力と関連があるのかも知れない。髪を失うことは、力の喪失を意味していた。しかし、サムソンの力の源が毛髪にあるのではないことはいうまでもない。また彼の肉体にあるのでもない。彼がその毛髪を剃ることを許したことは、彼がナジル人としての誓願を破り、神との関係を絶ったことになるのである。その結果、主はサムソンを離れた(20)。**ほかの人**　直訳は「人間（アダム）のひとり」。

18　デリラは、サムソンが今度こそ真実を打ち明けたことを直感によって知ったのであろう。彼女はペリシテの領主たちに上ってくるようにと呼んだ。そのとき領主たちは銀をもって上ってきた。すなわちデリラとペリシテの領主たちとの間で約束されていた銀一一〇〇枚のことであろう（5）。

19　**彼を苦しめ始めた**　サムソンが寝ている間に両手を縛り、7房に分けてあった髪をことごとく切り落とした後に、侮辱し始めたのであろう。

20　**彼は主が自分を去られたことを知らなかった**　民数記14・42以下、ヨシュア7・12（アカン）、サムエル上16・14、18・12、28・15（以上サウル）等、この言葉はしばしば登場するが、非常に厳しい言葉である。ここにおいても、サムソンの力の源がその毛髪にあるのではなく、臨在される主ご自身にあることが明示される。

21　**両眼をえぐり**　サムソンを捕らえたペリシテ人たちは、即座に彼を殺すのではなく、まずなぶりものにして楽しもうという意図がうかがえる。**ガザ**　地中海沿岸にある、ペリシテの5つの都市国家の一つ。**うすをひいていた**　通常奴隷のする仕事であり、やはりサムソンをなぶりものにしようという意図がある。

22　**その髪の毛はそり落された後、ふたたび伸び始めた**　この間の時間の経過がどれくらいであるか分からないが、この間は、サムソンにとっては悔い改めと神との交わりと回復の時として必要な時間であった。この後続くペリシテとの最終決戦（23～31）の背景には、この期間の主との交わりの回復が必須であった。

参考図書　10月1日分と同じ。

8日　礼拝メッセージ例

聖　　書　士師16・4〜6、15〜22
タイトル　あなたも私もナジルびと
暗唱聖句　わたしは生れた時から神にささげられたナジルびとだからです。　士師16・17
目　　標　罪から聖別されて、力強い信仰者生涯を送る。

（和田　治）

導入

先週学んだ士師のお名前を覚えてますか？　そう、ギデオンでしたね。今日一緒に学ぶのは、十二人の士師の最後の一人、「サムソン」。その力は、ペリシテ人の町の門を二本の柱ごと引き抜いて、高い山の上まで運んだほどでした！　またある時は、ロバのあごの骨一つで、一千人ものペリシテ人を倒したのです。世界一の力持ち、サムソンはどんな一生を送ったのかな？

ナジルびと、サムソン

みなさん、「ナジルびと」っていうのはね、神様のものとして聖く生きるように選ばれた人のことです。「生まれた時から神にささげられたナジルびと」だったサムソンは、御使いに命じられ、一切ぶどう酒を飲まず、髪の毛を剃り落とすことをしませんでした。その長い髪の毛は、神様がサムソンにものすごい力をお与えになっているしるしでもありました。その頃、イスラエルの民はペリシテ人から苦しめられていました。サムソンは神様の霊の力によって、ペリシテ人を次々と倒していきました。ところがサムソンの気持ちは、まっすぐ神様に向くのではなく、なんと、女の人の方に向いていたのです。

ばらしちゃダメなのに…！

ある時、サムソンはデリラという女の人に恋をしました。それを知ったペリシテ人たちが、デリラに言いました。「やつは俺たちの敵だ。その力の秘密を探れ。どうしたら鎖で縛り上げることができるか、ぜひ知りたいのだ。お礼のお金はたんまり用意しているぜ」。

デリラは早速、サムソンにおねだりします。「ねえあなた、どうしてそんなに強いの？　私に教えてちょうだい」。でも、サムソンはデリラに本当のことを言いませんでした。秘密をばらしてしまえば、神様に背くことになるからです。三度、デリラからねだられましたが、ましてて秘密を守り通しました。でも、デリラはあきらめません。「サムソン！　今度こそ力の秘密を教えてちょ

8日　礼拝メッセージ例

うだい！」毎日毎日、デリラはサムソンにしつこく願い続けました。ついに根負けした彼は、デリラに秘密をばらしてしまったのです。「実は、わたしの頭にはかみそりを当てたことがないんだ。それが力の秘密さ。生まれた時から神にささげられたナジルびとだからね」。

悔い改めたサムソン

さあ、大変！　デリラの知らせを受けたペリシテ人たちは、サムソンを捕まえにやってきました。デリラはサムソンをぐっすり眠らせ、人を呼んで髪の毛を剃らせてしまったのです！　「サムソン、あなたを襲いにペリシテ人が来たわよ！」「なあに、いつもの調子で片づけてやる！」彼は、神様とのお約束を破ったために、神様の聖い力が自分から去ったことに、気づいていなかったのです…。神様がご一緒ではなくなったサムソンは、ペリシテ人に捕えられ、両目をえぐり出されました。そして、牢獄の中で鎖につながれて、臼をひかされたのです。

　その牢獄は、サムソンにとって、悔い改めの場所になりました。ナジルびとなのに聖い生き方から大きく脱線してしまったこと、神様との大切なお約束を破ったこと…。神様は悔い改めたサムソンに、もう一度力を注いでくださいました。頭の毛がだんだん伸びていったのです。ペリシテ人の神、ダゴンの祭りに引き出されたサムソンは、劇場の柱を抱えて、神様に祈りながら身をかがめました。すると建物が崩れ、その下敷きで、たくさんの敵を倒しながら、彼も死んでいったのです。神様に背く大勢の人々が、サムソンによって倒されました！

私たちもナジルびと

みなさん、実は私たちもサムソンのように、神様のものとして聖く生きるように選ばれたナジルびとなんです！　だって、イエス様の十字架の血によって罪を赦（ゆる）され、聖くされたんですもの。皆さんは、神様から与えられた力や知恵や時間やお金などを、何のために使っていますか？　ナジルびとらしく、神様のためにこそ喜んで使おうではありませんか。今日、もう一度心から神様のもとに帰って、「神様、僕は、私はあなたのものです。聖くして神様のために用いて下さい。喜んでお献（ささ）げします」と祈りましょう！　聖く歩む力、神様と人を愛する力を求めましょう。神様は必ずお与え下さいます！

　♪今こそキリストの愛に応えて♪（詩・曲　田中英昭）

※教会教育室ＨＰで楽譜をダウンロードできます。

聖書　マタイ7・24〜27
テーマ　岩を土台とする生涯

（福井文彦）

序論

5章から7章の「山上の説教」の結びとして、イエスは二種類の「土台」のたとえをお話しされました。これはイエスに対するただ二つの応答方法で、み言葉を聞いて行うか、拒むかで、私たちの生涯と永遠が決定するのです。同時に、「山上の説教」の目指すところを示しています。

一、人生には堅固な土台が必要である

イエスは最後に、岩を土台として自分の家を建てる人(24)と砂を土台として自分の家を建てる人(26)について話されました。家を建てるときに土台は一番大切な工事です。その家を建てるのに、イエスは岩を土台として建てる人は賢い人であり、砂を土台として建てる人は愚かな人である、と言われました。

なぜなら、岩は丈夫なものであり、堅固なものです。ですから、〈雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけても、倒れることはない〉のです。一方砂は弱く、崩れやすいものです。ですから、〈雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまう。そしてその倒れ方はひどい〉のです。

このたとえでは、〈家〉は私たちの人生になぞらえられています。したがって、〈岩〉と〈砂〉は人生の土台のことです。私たちがイエス・キリストを信じたからといって、順風満帆（じゅんぷうまんぱん）で、御利益（りやく）があって、よいことづくめの生活となるわけではありません。イエスを信じたら必ず商売繁盛、無病息災になるというわけにはいかないのです。イエスは〈雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いて〉と言われ、イエスを信じても、さまざまな人生の嵐に会い、人生にはさまざまな試練があると言われました。

ですから、その人生の土台を岩にするか、砂にするかは非常に大切な選択であり、決断を求められるのです。なぜなら、イエスが言われた〈賢い人〉のように、岩を人生の土台とすれば、試練に会っても、耐えて勝利することができます。また終わりの日の神の裁きの嵐にも耐えることができます。しかし、〈砂〉を人生の土台とすれば、さまざまな試練は人生を崩壊させ、完全な破滅すらもたらすことになります。また終わりの日の神の裁きの

嵐にも耐えることができないのです。ですから、人生に堅固な土台が必要なのです。

二、み言葉を聞いて行う

イエスは〈わたしのこれらの言葉を聞いて行うものを、岩の上に自分の家を建てた賢い人〉と言われました。その〈岩〉とはイエスの〈言葉〉であり（Ⅰテモテ６・３）、みこころであり、イエスご自身です（Ⅰコリント３・11）。

ですから〈岩の上に自分の家を建て〉るとは、イエスの言葉を聞いて行うことであり、〈聞いて行う〉とは聴従することです。そのことをルカによる福音書では「地を深く掘り、岩の上に土台をすえ」（６・48）と言っています。岩の上に堅固な土台をすえるために、土を掘る努力が必要ですが、それはみ言葉を深く掘り下げて学ぶことです。深く掘り下げて学ぶとは、単なる研究ではなく、聖書の正しい理解を持ち、これを敬い、み言葉を日常生活（個人生活、家庭生活、社会生活、教会生活）に適用して生きることです。また、それは謙虚にみ言葉に聴き従うことでもあります。また、神のみ言葉を日常生活に適用することによって、生活の力が与えられます。

その確固たる基盤の上に人生という〈家〉を建てるのです。しかし、この家にも試練のときがやって来ます。〈雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いて〉家を打ちつけるとき、これは三重の災難です。屋根には〈雨〉、土台には〈洪水〉、壁には〈風〉の大嵐が襲います。しかし〈倒れることはない〉理由は〈岩〉を土台としているからです。

対照的なのは、〈砂の上に自分の家を建てた愚かな人〉です。〈砂〉とは「土台なしで、土の上に」（ルカ６・49）という意味です。試練が来たとき、その〈倒れ方〉は〈ひどい〉のです。〈ひどい〉とは破壊が完全であるという意味です。理由はイエスのみ言葉を聞いても〈行わな〉かったからです。謙虚にみ言葉に聴き従わなかった、すなわち、イエス・キリスト以外のものを頼みとしていたからです。

結論

イエスは、山上の説教の最後のたとえで、主のみことばに聞き従うか従わないかによって、救いか滅びか、いのちか死かが定まると言われました。みことばを聞いて行う確かな生き方、生涯を送る者とならせていただきましょう。

研究資料

（中島啓二）

山上の説教の結論の部分である。15～20節では「実を結ぶ」ことに、21～23節では「父の御旨を行う」ことに強調点が置かれているが、「（実を）結ぶ」（17）、「行う」（21）の両者とも動詞は〔ギ〕ポイエオー（第一義は「行う」）である。そして今回の個所で中心的に命じられている「行う」（24）もまた〔ギ〕ポイエオーなのである。このように山上の説教の結論部分では繰り返し「行い」が強調されていることがわかる。人は、イエスの言葉を聞いて、単に知的に満足するだけではなく、「聞いて行う」（24）ことが不可欠なのである。その、聞いた上での「行い」の有無が、終末の審判において、その人が滅びるか否かを決定的に左右するのである。もちろん、この「行い」の強調は、行為義認の肯定でも、信仰義認の否定でもない。山上の説教は、それだけで完結するものではなく、「神の恵みによる救い」という福音を中心テーマに据えた福音書全体（あるいは聖書全体）という大きな文脈で捉える必要があるのである。神の恵みによって新しく生まれた者は、生き方も新しくされねばならない。その生き方こそが、イエスとその言葉を土台とする生き方であり、この賢い人と愚かな人のたとえは、読者をそのような生き方へと誘（いざな）う招きであると言える。

テキスト

24　それで　以下のことが、山上の説教の結論として語られていることを示す接続詞。**わたしのこれらの言葉**　5章から語られてきた山上の説教を指す。原文でも「わたしの」が先頭にあり、そこに強調点がある。キリスト者の行動の基準は、律法の成就として来られた、イエス自身の言葉なのである。**聞いて行うもの**　神の言葉・神の意志に関して、聞くだけでなく、行いが伴わねばならないことが強調されている（12・50、ルカ8・21、ヤコブ1・22～25等）。**岩の上に**　揺らぐことのない堅固な土台を意味する。イエスは「あなたこそ、生ける神の子キリストです」（16・16）とのペテロの信仰告白を踏まえて、「この岩の上にわたしの教会を建てよう」（16・18）と言われた。イエスの言葉に対する絶対的な信頼と服従に基づく生き方が、その人の人生を揺るぎないものとする。**賢い**　〔ギ〕フロニモスで「忠実、賢い、眼識ある」という意味。真理を知っているだけでなく、その真理に基

づいて行動すること（25・45参照）。「愚かな（ギ）モーロス）」（26）と対比。25・1〜13の十人のおとめのたとえにも同じ対比が用いられている。マタイにおける「賢い」とは、端的に言えば「忠実、従順」であること。イエスの教えに忠実に従って行動するかどうかが重要なのである。**比べることができよう**　直訳は「すべて〜のようである」。原文では（ギ）パース（すべて）が節の冒頭に置かれており（26節も同様）、このことが、この警句的なたとえに「招き」の響きを持たせている。聴衆・読者は聞いて行う者となるようにとの勧告・招きを受けているのである。

25　雨が降り…風が吹いて　パレスチナに特有の嵐の描写であろう。突風と激しい雨により、通常はワジ（水のない川）であるところに水があふれ流れる。**洪水が押し寄せ**　直訳は「川がやってきて」。川の氾濫を表すのだろう。旧約では終末の審判がしばしばこういった情景で描かれる（エゼキエル13・10〜15、イザヤ28・17等）。**その家に打ちつけても**　雨、洪水、風のすべてが「打ちつける」の主語であり、その打撃の大きさを表している。**倒れることはない**　しかし賢い人は最後の審判のときにも滅びない。理由は、**岩を土台としている**　すなわちイエスの言葉に忠実に従って生きているからである。

26　聞いても行わない者　イエスの言葉を聞くだけで行わないことが、その人の愚かさとなる。**砂の上に**　砂は土台として不適当なものである。

27　倒れてしまう　愚かな人は賢い人とは全く正反対の結末を迎える。**その倒れ方はひどいのである**　ここまでは一言一句がきれいに対応して比較されてきた両者であるが、この最後の言葉はその対比のバランスを（恐らく意図的に）崩すものである。その倒れ方のひどさは、それほどまでして強調したい要点だと言えよう。すなわち人の運命に対する最後の審判の徹底的な決定性がここには表されている。ここまで述べてきた通り、このたとえの中心的な視点は、最後の審判のときに据えられているが、とはいえ、地上での人生における種々の試練を除外する必要はない。究極的には最後の審判を見据えつつ、人間の生き方は、キリストを土台としているか否かによって、いざというときにふるわれるものなのである。

参考文献　注解書 D. A. Hagner (Word), D. Hill (NCB). その他 The IVP Bible Background Commentary: NT

15日 礼拝メッセージ例

聖　書　マタイ7・24～27
タイトル　びくともしない土台は?
暗唱聖句　わたしのこれらの言葉を聞いて行うものを、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができよう。　マタイ7・24
目　標　み言葉を聞いて行う、堅固な生き方をする。

（和田　治）

導入

イエス様は山の上で、沢山の大切なお話をされました。神様を信じて生きていく人生とは、どのようなものか、わかりやすい言葉で教えられたのです。その最後の個所が今日のお話です。

二種類の家を建てた人たち

皆さんは家が建つところを見たことがありますか。大工さんたちが一生懸命、土台を造り、柱を立て、壁や屋根を打ち付けて、立派な家を建て上げていきます。一日、一日、忠実にコツコツと作業を進め、やがて完成するのを見ると、すごいなーと感動します。

イエス様は、山の上のお話で最後に、二種類の家を建てた人たちを譬(たと)えにして話されました。

ある人は、自分の家を岩の上に建てました。頑丈な、ちょっとしたことでは崩れない岩を、深く深く掘り、土台をしっかりと造りました。建てるのは時間がかかっても、がっしりとして、ちょっとやそっとでは崩れない、大変丈夫な家です。おかげで、大雨が降り、水が家に押し寄せて洪水になっても、ゴーゴー、ヒューヒューと強い風が吹きつけても、その家は倒れることはありませんでした。

別の人は、家を砂の上に建てました。砂はやわらかく、土台を掘るのも岩より簡単です。皆さんも砂浜で遊んだことが、あるでしょう。砂で穴を掘ったり、山をつくったり。楽しいですね。でもせっかく造り上げても、少し大きな波がやってくると、簡単に流されていってしまいますね。

砂の上に建てた家はどうでしょう。大雨が降り、水が家に押し寄せ洪水となり、強い風が家に吹き付けると、グラグラと揺れ動き、ついに土台ごとぺっしゃんこに倒れてしまいました。

10月

15日　礼拝メッセージ例

みことばを実行する人

イエス様はこの二種類の家を建てた人たちを通して、何を伝えようとされたのでしょう。

まず、岩の上に家を建てた人とは、イエス様の言葉を聞いて、それを行う人のことを指しています。イエス様はこうおっしゃいました。「わたしのこれらの言葉を聞いて行うものを、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができよう」。

岩の上の家とは、私たちの人生を意味しています。私たちの人生にはいろいろなことが起こりますね。嬉しいこと、楽しいこと、そして苦しいこと悲しいこと、いっぱいあります。良いことばかりではなく、どうしてこんなことが…、もうどうして乗り越えたらいいのかわからない！というようなことが起こってきます。皆さんはそのような辛い経験はありませんか？　まさに人生に大嵐がやってきた気分です。

しかし、私たちが日頃からイエス様を信じて、イエス様の言葉をしっかりと心にたくわえ、それを実行しているなら大丈夫だよ、とイエス様はおっしゃっているのです。

教会学校でお話を聞いたり、一人で聖書を読んだりするときに、イエス様は私たちに語りかけて下さっています。それを聞くだけですぐ忘れてしまう人、覚えているけれど行わない人、それは砂の上に家を建てた人です。「わたしのこれらの言葉を聞いても行わない者を砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができよう」とイエス様はおっしゃいました。

聖書にはイエス様のメッセージがつまっています。み言葉が心にたくわえられて、み言葉に従い、それを行うときに、私たちの人生はしっかりとした、確かなものになります。人生の大嵐が押し寄せてきても、それを乗り越える力が不思議と与えられるからです。目に見えるものを恐れないで、見えないけど確かに生きておられる神様に信頼できるからです。

まとめ

岩の上に家を建てた人と、砂の上に家を建てた人。み言葉を行う人と、行わない人。皆さんはどちらになりたいでしょうか。神様は忠実にみ言葉を行おうとする人に、それを成しとげる助けと力を与えてくださいます。

♪かしこい人が家を♪（イン93、ホ24）

聖　書　マタイ13・1～9、18～23
テーマ　四つの種

（金井信生）

序論

イエスは多くのたとえをもって神の国の真理を説き明かされました。この「種をまく人」のたとえの意味は、イエス自身が説き明かしておられます。

一、み言葉にある命

種まきがまく種とは、〈御国の言〉すなわち神のみ言葉です。そして種が芽生えるのは、種の内に命があるからです。この命には人を生かし、豊かに実を結ばせる力があります。「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きる」（マタイ４・４）との言葉は、人間を観察して得た結果ではありません。人間を造られた方による説明です。

イエスはまず〈種まき〉となってみ言葉を語られました。それは自分の栄光のためではなく、私たちに命が必要だからです。

命は何もないところには生じません。必ず命から命が生れます。そして生れた命は、養われ守られなければ消えてしまいます。私たちの命は神から与えられたものであり、神から離れたところでは保つことができません。神と言葉を交わす交わりの中でさらに豊かなものとされていきます。

二、時が試練

土地の状態そのものは、種が落ちた時点である程度わかります。しかし、神の言葉という種がまかれた人の心の状態は、すぐにわからないことがあります。しかし、どんな心であるかは、観察している中で、時間の経過とともに明らかになってきます。

〈道ばた〉に落ちると、種は接触していますが、中に入ることはありません。これはみ言葉を聞いても自分に結び付けない人です。〈石地〉に種は入っていきますが、根を下ろすことはできません。み言葉を聞いて喜んでいるようですが、生き方を変えるつもりはありません。〈いばらの地〉の間では根を下ろし芽が出ても、上に伸びることが妨げられています。み言葉が中心でも第一でもなく、他のことで心がふさがれているので、実を結ぶに至りません。

しかし、もし良い地に種が落ちるなら、種は入り込み、

しっかり根を下ろし、充分に伸びて豊かに実を結ぶことができます。

み言葉に対するこれらの応答は、私たちが福音を伝える相手の状態であり、またかつての私たちの姿です。

聖書の時代の農業は、種をまいてから耕す方法だったとも言われています。土が薄く、日本のように畑と道がはっきりと分けられていないところに種をまき、後から耕したところが畑となって成長していったというのです。この方が、み言葉と私たちの関係に近いかもしれません。

最初からよく耕された柔らかな心というものはありません。とにかく種をまき、耕すことが必要です。み言葉を聞き、日々の歩みの中で苦しんだり戦ったりする中で、み言葉の助けを得、やがて実りを得ることが多いのではないでしょうか。

三、約束されている収穫

良い地であっても、種がまかれなければ収穫はありません。しかし、一度種がまかれると、最後の結果ははっきりと違ってきます。特にイエスはみ言葉の収穫は驚くほど大きいと約束されました。私たちもキリストを信じ、み言葉を聞き始めても、最初から大きな変化はないように見えるかもしれません。しかし、み言葉を聞き続けるときに、必ず変わってきます。

ですから、できるだけやわらかい心、聴いて従う心をもつことが大事です。また、毎日の出来事の中で、み言葉をあてはめて、慰められたり、進む指針を得たり、あるいは自分の考え違いを示されること、これがみ言葉の種まきです。

まかれた種が収穫に至るには、時を要します。世話も必要です。しかし、み言葉の種がまかれなければ、人は生きられないのです。イエスが忍耐深く、み言葉の種をまき続け、ようやく弟子たちが整えられていったように、私たちも自分に対して、周囲に対して、種をまき続けましょう。豊かな収穫があると約束してくださった神は、必ずみ言葉を聞き続けるものを成長させ、祝福してくださいます。

結論

命の種である神のみ言葉を聞いて悟り、忍耐深く守って、豊かな実を結ぶ者となりましょう。

研究資料

（金井由嗣）

本日の個所の原文には、特に釈義に影響するような特別な用語や構文は見られない。原典にこだわるより、良質の翻訳聖書で前後の文脈に注意して繰り返し読むことが大切である。

テキスト

1 その日 前章の記事との連続性を強調。マタイでは12・1〜13・52が同じ安息日の出来事として描かれているが、マルコの平行個所では間にいくつかの出来事が挟まれている。マルコは、それぞれのエピソードに対して類似した別の時期の出来事を関連付けて記しているのかもしれない。いずれにせよここでは、このたとえが語られた時期に注意する必要がある。パリサイ人や律法学者からの批判と疑い、主の家族からの無理解は、主イエスを神から遣わされたメシアと信じる弟子たちにとってつらい経験であった。群衆は主イエスのもとに集まっているが、その多くは病気の癒しなどの奇跡や実利を求めていた。少し前には（11章）バプテスマのヨハネさえ、イエスが本当にメシアなのかどうか、疑問を漏らしていた。神の国の福音が期待したようには多くの人々に受け入れられない現実を前にした弟子たちに対する主の励ましと教育が、13章の一連のたとえの骨子をなしている。

3〜9 種まきのたとえ たとえの意味は明瞭であり、その解釈も主イエスが自ら教えているとおり（18〜23）なので、解説は不要。

11 天国の奥義 これほどに説明が容易なたとえを、主イエスが「奥義」（新共同訳では「秘密」）と呼んでいることに注意したい。「奥義」〔ギミュステーリオン〕は、特別に許された人にしか知らされない隠された真理を意味するが、新約聖書ではしばしばその奥義が神の民に「明らかにされた」ことへの喜びが強調される（『聖書神学事典』）。たとえのそれぞれのモチーフが何を意味するか、頭で理解しただけではこのたとえの「奥義」を知ったことにはならない。それはなお、「聞いても悟らず、見ても認めない」鈍い心にとどまっている状態である。

1．「奥義」は、「天国」の性質にかかわっている。マタイは神の名を使用することを避けて「天国」と呼び変えているが、他の福音書で用いられる「神の国」と同義語である。当時のユダヤ人の理解では、「神の国」は地上

の権力を無力化する圧倒的な力をもって君臨すべきものであり、誰（だれ）もその力には抵抗できないはずであった（ダニエル2・44など）。ところが、このイエスのたとえでは神の国（天国）が人間の側の応答によって左右され、拒否され得るものとして描かれている（ハンター、ラッド参照）。それゆえ、重要なのはみ言葉を聞く者の聞き方と、聞いたみ言葉に対する応答の態度である。神の国は権力で地上を支配するのではなく、多くの反対や無関心に出会いながら、福音を積極的に受け入れた少数の人々の間で少しずつ成長し、やがて実を結ぶものなのである。この後に続くたとえ（麦と毒麦、からしだね、パンだね）によって、さらにこの点が強調される。

2.「奥義」には、喜びと祝福が伴う。16～17節で主が語っているのは、旧約の預言者や義人が熱心に願っても見聞きすることができなかった福音に弟子たちが与っていることの喜びである。まかれた種の多くが実を結ばなかったとしても、「百倍、六十倍、三十倍」という収穫の喜びが損失をはるかに上回ることになる。このたとえの焦点は、この収穫の喜びに当てられている。それはまた、11・25～30の主イエスの言葉と同じ方向を示している。「知恵ある者や賢い者」ではなく、み言葉を聞いて素直に受け入れる「幼な子」に神の国の奥義（福音）が啓示される。奥義を理解するために必要なのは知的能力ではなく、イエスの弟子として生きる、単純な信仰である。

13 持っている人は…いよいよ豊かになる　天国の奥義を持っている人とは、福音を素直に受け入れて従う主イエスの弟子たちのことである。この個所の彼らがそうであったように、福音に聞き従いつつ主に近づいていく人には、さらに福音の奥義が解き明かされる。それゆえ、聖書のみ言葉に対する知的理解も次第に備わっていくのである。それに対して、知的理解にとどまって本気で福音を受け入れない人には、み言葉はますます理解困難なものとなっていき、知的に理解することさえ不可能となってしまうのである。

参考図書　織田昭『マタイによる福音』、A・M・ハンター『イエスの譬えの意味』、G・E・ラッド『神の国の福音』、藤巻充『祝宴への招待』、『聖書神学事典』、J. Nolland (New International Greek Testament Commentary)、D. L. Turner (Baker Exegetical Commentary)。

22日 礼拝メッセージ例

聖　書　マタイ13・1～9、18～23
タイトル　豊かな実を結ぼう！
暗唱聖句　ほかの種は良い地に落ちて実を結び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった。マタイ13・8
目　標　み言葉を聞いて悟り、忍耐深く守って、実を結ぶ者となる。

（飯田勝彦）

導入

めぐみさんは、毎日電車で通学していました。ある時、悪天候のため電車が大変遅れてしまいました。すると駅の構内アナウンスがあり「本日は、ご迷惑をお掛けして申し訳ございません。ただいまバスを…」と声があったとたん、めぐみさんはアナウンスを最後まで聞かず、バスに乗ろうと急いで駅から飛び出しました。でも、バスはなかなか来ません。めぐみさんは、バスがすぐに来ると思って外に出ましたが、案内放送は「ただいまたバスを用意しておりますので、もうしばらくお待ちください」とのことでした。案内を最後までよく聞かなかっためぐみさんは、寒い中バスを待たなければなりませんでした。

皆さんは、人の話を最後までしっかりと聞いていますか？

み言葉の種が蒔かれている

イエス様は、聞くことの大切さを教えるため、弟子たちに種まきのお話をされました。イスラエルの種まきは、豆まきのように種を畑にまくのです。

ある人が種をまきました。まいている間に、ある種は道ばたに落ち、鳥が食べてしまいました。

ほかの種は、石だらけで土の少ない石地に落ちました。そこは土が浅いので、すぐ芽を出しましたが、日が昇ると焼けて根がないために枯れてしまいました。ほかの種は、茨の間に落ちて茨が伸びて種をふさいでしまいました。でも、ほかの種は良い土地に落ち、ぐんぐんと成長して豊かな実を結ぶことができました。

蒔かれた種は、いろいろな土地に落ちました。

皆さんも野菜や花の種を蒔いたことがありますか？植物がちゃんと成長するために大切なのは、土です。いくら良い種をまいても土が悪いと育ちません。

イエス様が言われた種とは、「み言葉の種」です。そして、土とは「皆さんの心」です。皆さんは毎週教会に来

てみ言葉を聞きます。それは、神様がいつもみ言葉の種を皆さんの心にまいているのと同じです。それでは種はどこに落ちてますか？

神様のみ言葉の種は、どんな心に蒔かれていますか？道ばたとは、み言葉を聞いても、右の耳から左の耳に抜けて、すぐに忘れてしまう心です。石地とは、み言葉を聞いて「よいお話しだった」と喜んで受け入れますが、それをしっかりと心に留め（とど）ないので、苦しいことや悲しいことがあるとすぐつまずいてしまう心です。茨とは大切なものを大切にしないよう妨げる、誘惑に負けてしまう心です。

良い土地とは、み言葉を聞いて悟る心です。毎週、皆さんはどのような心でみ言葉を聞いていますか？

豊かな実を結ぶ

旧約聖書に「聞け、イスラエルよ」という大切な言葉があります。神様は私たちが、神様の言葉をしっかりと聞くことを願っておられます。

毎週、聖書のお話を聞きますが、皆さんは「僕には関係ないなぁ～」、「そんな昔の話、わたしは興味がない」と別のことを考えながら聞いてはいませんか。また、み言葉を暗唱してその時は覚えていても、教会学校が終わると「あれ、今日のみ言葉何だったっけ？　まっいっかぁ～」なんてことないですか。

聖書のみ言葉を神様の言葉として聞きましょう。そして「このみ言葉は、僕にどのような意味があるのだろう」とか「神様は、わたしに何を教えようとしているのだろう」という心で聞きましょう。そうするなら、み言葉の種がみなさんの良い心の土地に蒔かれて豊かな実を結びます。その豊かな実とは、神様の祝福によって、愛の人にされることです。神様がみ言葉を通して結ばせてくださる愛の実によって、自分だけでなく周りの人たちをも幸せにするのです。

まとめ

神様は、皆さんに愛の実を結ぶ人になって欲しいとみ言葉の種をまきます。柔らかく教えられやすい心で聞きましょう。

さて、今日のみ言葉は、良い土地に蒔かれたでしょうか。

♪みことばよくきいて♪（ホ129）

聖書 マタイ18・21〜35
テーマ 七たびを七十倍するまで
（石田高保）

序論

イエス様を信じて生まれ変わった人は、イエス様に生涯、仕えて行きたいと願うものです。同時に主のように隣人に仕えてゆきたいと願うもので、これはクリスチャンの本能と言ってよいでしょう。それはイエス様の言うしもべの在り方です。「あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、すべての人の僕（しもべ）とならねばならない」（マルコ10・44）。では、イエス様のしもべの特徴は何でしょうか。その一つは豊かに赦すライフスタイルです。

一、赦しの土台

私たちが他の人を赦せるとするならば、それは神様がまず、私たちを赦（ゆる）されたからにほかなりません。神様から赦されていることを腹の底から受け取らないうちは、どんなに歯を食いしばっても他の人を本気で赦すことはできないものです。なぜなら私たちの本性は赦しではなく、仕返しだからです。人から言われたことに言い返すことや、されたことにやり返すことには、なんの努力も要りません。復讐心は人間の罪深い性質から自由に流れ出る罪悪です。リベンジという英語がすっかり日本語として定着してしまったほどで、スマートな響きですが、要は仕返し、復讐、意趣返しという意味です。人間性が原罪によって歪められているので、放っておいたら社会も歴史もリベンジで溢れ返ってしまうでしょう。そんな復讐心の洪水の中で、本気で他の人を赦して行くためには、どうしても神の恵みが必要となります。神様から赦されていることを受け取らなければ始まらないのです。

さて私たちの犯した罪が、イエス様によって十字架で贖われた時、神様の裁きは私たちの身代わりとなられたイエス様に下されました。神様はその完全ないけにえに免じて、御子を受け入れる者すべてを、赦してくださいます。私たちには何の罪滅ぼしも、償いも、善行努力も要りませんでした。ただ自分の罪を悔い改め、イエス様を受け入れただけです。「罪の支払う報酬は死」ですから、死んでお詫びをするほかはない罪という借金を、イエス様は十字架にかかることによって、私たちの代わりに支払って下さいました。罪という多重債務ですっかり首が回らなくなったところを、イエス様は肩代わりして下さったのです。借金地

獄から解放され、大手を振って歩ける身に変えられました。このことは僕が王様から一万タラントの負債を免じられたというたとえに通じます。

二、赦しの方法

赦しについての聖書の原則は、エペソ4・32「互に情深く、あわれみ深い者となり、神がキリストにあってあなたがたをゆるして下さったように、あなたがたも互にゆるし合いなさい」つまり赦すことはクリスチャンの選択科目ではなく、必修科目です。

〈主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯した場合、幾たびゆるさねばなりませんか。七たびまでですか〉、この当時の決まりでは、赦しの限度は三回だということです。ペテロはその限度を倍以上に気前よくはずんで〈七たびまでですか〉と質問しています。彼は七回も赦せば十分で、それを越えたら赦さなくてもいいと考えていたことでしょう。じっさい人の同じ過ちを三回も赦せたら、それは聖人君子かしれません。それに対してイエス様の言われたことは〈七たびを七十倍するまでにしなさい〉、つまり無限に赦し続けなさいということでした。それに続くたとえ話では、ある主人が六千億円いう一生かけても返せない僕の借金を棒引きしています。僕は信じられないほどの寛容さに圧倒され、感激の涙を流したことでしょう。ところがそのすぐ後で、その当人が百万円ほど自分に借金をしている人を勘弁しないで、監獄に入れてしまったというのです。この僕のようなことをしてはいないかと探られます。赦さないことで自分を守れると考える人もいますが、それは勘違いで、かえって自分の身を蝕（むしば）むことになります。恨みと憎しみによって自分が苦しみ、平安を失ってしまいます。赦さないという種を蒔けば、断絶という実を刈り取るのです。しかし赦すという種を蒔けば、和解と平和という実を刈り取ることができます。

結論

では、具体的な赦しの方法とはどのようなものでしょうか。①認識。誰（だれ）について、何を赦さないでいるかを明確にする。②悔い改め。イエス様によって神から赦されているにもかかわらず、人を赦さないでいたことを悔い改める。③血潮による赦しを受け取る。④傷つけた人を祝福する祈りをする。⑤赦すという生き方を選択し続ける。⑥聖霊の導きによって和解する。以上のように、イエス様に仕えるしもべは豊かに赦す者です。

研究資料

（宮澤清志）

テキスト

21 そのとき　マタイにおいては、新しい話しをはじめるための導入の言葉となっている。**兄弟**　ここでは肉親の兄弟ではなく霊の兄弟、すなわち神の家族であるキリスト者を指す。**幾たび**　この言葉には、イエスから教えられているように、赦(ゆる)すには赦すが限界がある、という思いが言外に含まれている。**七たび**　この数は、質問者であるペテロが赦すことのできる最大限の数字だったのであろう。ユダヤ教においては、赦されることのできるのは３回までであった。

22 七たびを七十倍するまで　何も、この言葉は字義どおりに490回赦すという意味ではない。イエスがここで言わんとすることは「無限に」という意味である。罪を犯した人に対しては、制限を設けるべきではない。なぜならば、神の愛は無限だからである。しかし、無限に赦すことと、罪を不問にすることとは異なる（15～20参照）。

23～27　イエスは前２節の意味を補強するものとして、ひとつのたとえを語られる。**一万タラント**（24）　１タラントは六千デナリ。１デナリは労働者一日分の賃金。わかり易くするように、労働者の日給を1万円とすると、六千億円。しかし、あまりピンとこないので、当時の王と比較すると、ガリラヤとペレヤの王ヘロデ・アンテパスの年収は200タラント、アケラオの年収は600タラント。また権勢を誇ったソロモン王は666タラントだったといわれている（列王上10・14）。**あわれに思って**（27）　はらわたが痛むほどの感情を表す言葉。**ゆるし**（27）「解放する」「自由にする」という意。**負債を免じてやった**（27）　ここでは「取り消す」「帳消しにする」などの意味である。王は、猶予するという選択肢ではなく負債そのものがないものと認めたのである。

これらのことから考えて、このたとえ話の真の意味は何であろうか。まず、一万タラントという負債の額は、いうまでもなく人が一生かかっても返すことができないほどの大きな負債である。このような誇張とも思えるたとえによって、イエスは、人間の持っている一生かかっても返すことができないほどの罪の大きさを語っている。同時にそのような大きな負債を無条件に免除した王にも注目したい。王なる神の支配とは、ここで示される

ほどに深い憐みの支配であるということがはっきりと示されている。また、**決算が始まると**（24）とあるように、決算が始まるまで自らの負債のあることに気づかない僕（しもべ）の姿は、罪の中にありながらもその罪に気付かない自らの姿そのものである。

28〜34　一方負債を免除された僕は、100デナリを貸している仲間を赦すことができなかった。100デナリそれ自体は、労働者100日分の賃金であることを考えると確かに高額である。しかし、この僕の負債である一万タラントから考えるとわずか60万分の1である。**出会い**（28）とは、むしろ「見つけ」とも訳すべき言葉で、偶然見つけたというイメージよりは、むしろ捜して見つけ出した、というイメージである。また赦された僕がとった行動も常軌を逸している。まず、**彼をつかまえ**（28）とは、羽交い絞めにするという意味の言葉である。また、**首をしめて**（28）とは、窒息させる、あるいは息を止めてものを言えなくするという非常に強い言葉が用いられている。あれだけの負債を免除された人物とは思えない取り扱いである。最後には、赦された僕は仲間を**獄に入れた**（30）。この言葉の直訳は「放り投げた」である。

　この様子を見ていた彼の僕仲間は、事の詳細を主人に説明した（31）。この僕のとった態度は、主人の怒りを引き起こした（34）。そしてこの僕を**悪い僕**（32）と呼んで断罪した。一万タラントの負債をつくった時でさえ、この主人は僕をこのようには呼ばなかった。

　仲間の負債を赦すことのできないこの僕の中に、友の罪を赦すことのできない人間の姿が示される。

35　前節までで、イエスによるたとえ話は終わった。この個所はこれまでのたとえ話の適用である。人間が神に対して負っている負債（罪）に比べれば、人間同士の負債（罪）は取るに足りないものである。私たちの創造者である神が私たちを赦してくださったのであれば、私たちも、互いに、しかも無制限、無条件に赦さなければならない。

参考図書　中澤啓介『マタイの福音書註解（中）』、増田誉雄『新聖書注解　新約1「マタイの福音書」』（以上いのちのことば社）、他

聖書 マタイ18・21〜35
タイトル 赦され、赦す恵み
暗唱聖句 わたしは七たびまでとは言わない。七たびを七十倍するまでにしなさい。 マタイ18・22
目標 神の無限の赦(ゆる)しを覚え、人を赦す者となる。

（飯田勝彦）

導入

学校や親から「みんなと仲良くしましょうね」とよく言われるでしょう。でも、みんなの友だちの中で仲が悪い人っていませんか？　いつも喧嘩し合っている人。いつも友だちの悪口を言っている人。お互いに責め合い、赦し合えないと辛いですね。赦されることは慰めですが、赦すこともすばらしい恵みと知りましょう。

赦される恵みを体験できなかった僕(しもべ)

ある時、ペテロが「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯した場合、何回まで赦さなければいけませんか。7回までですか？」と尋ねました。イエス様は「わたしは七たびまでとは言わない。七たびを七十倍するまでにしなさい」と答えられました。そして、天国を王と僕たちとの決算に例えて話をされました。王のもとに王から一万タラントの借金をしている僕が連れて来られました。主人である王は、僕に「お前の妻子や全財産を売ってでもして、借金を返せ！」と命じました。一万タラントの借金とは今で言えば、6千億円ほどに相当するものでした。僕は押しつぶされそうな借金を目の前にして王の前にひれ伏し「どうぞお待ちください。全部お返ししますから！」と必死になって願いました。すると、王は僕をあわれに思い、膨大な借金をすべて帳消しにしてやったのです。

しかし、その僕は自分から百タラント（約百万円相当）を借りている人を、借金を返すまで獄に入れたのです。この僕はどうして、王から赦されたように自分から借金をしている人を赦すことが出来なかったのでしょうか？この僕は、自分の借金が帳消しにされたことを恵みとして体験することができなかったのではないでしょうか。彼は王のあわれみを、心から感謝するどころか、ただ「赦されてラッキー、得した！」としか受け止められなかったのです。

赦され、赦す恵みを体験しよう！

もし、みんながこの僕なら王から赦されたことをどのように思いますか？　「やった！　これで何も心配しなくても良いや～。バンザーイ！」で終わりますか？

もし、赦されたことを大きな恵みとして体験したなら、赦してくれた王に精一杯の感謝をするでしょう。そして、赦された恵みを噛みしめながら、その恵みに生かされて行くのではないでしょうか？　赦された恵みを体験してすぐに、あわれみが必要な者を牢獄に入れるようなことができるでしょうか？

人を赦すことができるのは、赦された恵みを体験している人です。みんなは「赦された～」という体験がありますか？　赦しの体験をさせてくださる方は、私たちの救い主イエス・キリストです。

私たちは罪という負債を背負わされています。それは、一億円よりも重くて大きいのです。それを背負い続けると一生苦しみの中を歩かなければならないどころか、永遠の滅びへと向かってしまいます。でも、王であるイエス・キリストは、私たちを罪から解放するために、十字架でご自分の命を投げ出し、私たちの罪の負債を赦してくださったのです。このイエス・キリストの十字架を自分のものとして信じ受け取る時、キリストの救いの溢れる恵みを体験することができます。

赦しを体験している者は、イエス・キリストに感謝すると同時に、イエス・キリストを慕う者にされます。

そして、体験した恵みを隣人に実践できるようにされます。それは、他者を赦す形であらわされます。

誰（だれ）かを赦さないことで苦しむのは、実は自分なのです。いつまでも怒りや憎しみを持ち続けることは、心が赦せない相手に縛られていることになります。相手を赦すことができて初めて、心が楽になります。赦されることを嫌がる人はいません。本当の赦しを体験できた人の心は平安になります。ですから、赦すことは損することではなく、自分にとっても相手にとっても大きな恵みなのです。

まとめ

イエス様に赦された恵みで、隣人を赦す恵みを体験させていただきましょう。

♪ゆるすためです♪（ホ58、イン25）

聖書 マタイ22・1〜14
テーマ 婚宴への招き

（小泉 創）

序論

イエス様が、天国について教えておられる個所です。天国は王が、王子の婚宴の席を設けて、人々を招待するようなものだ、と話し始められます。イエス様が十字架にかかられる数日前のできごとです。

一、招きを拒む人々

最初に招かれた人々は、あらかじめ招待を受けたときには、「行きます」と答えていたはずなのです。ところが当日になると、そ知らぬ顔をして、畑仕事、商売など、取り立てて急ぎでもない自分たちの用事を優先しました。一般の結婚式でもそのような非礼はゆるされません。ましてや王の招待です。それは王自身を侮辱することです。

しかし不思議なことに、王はさらに別の僕（しもべ）をおくり、なおも彼らが来ることを願うのです。ところが、人々はその王の姿に感激し、悔い改めもせず、王の僕たちを捕らえて、殺してしまったのです。

ここに至って、彼らは王の怒りに触れました。問題は人々が招きを拒むことで、王ご自身を退けたことでした。

この王とは、神様の象徴です。招かれながら、招待を拒んだものとは、契約の民ユダヤの人々をあらわしています。旧約聖書を通して、救い主をおしえられ待ちながら、イエス・キリストを拒み、十字架につけた人々の姿です。神様がどれほど忍耐強く待ち、働きかけておられるか、それに比べて人がどんなにはかなく頼りない存在であるかを教えられます。

二、集められた人々

婚宴の準備のため、大変な労力、財がつぎこまれ、あとは喜びの時を待つだけですが、婚宴をともに喜ぶ民がまだいません。王は、町の大通りで出会った人々を誰（だれ）でも連れてくるようにと僕に伝えます。王子の婚宴にあずかれたのは誰でしょうか。きよく、正しく、罪なき善人たちではありません。〈出会う人は、悪人でも善人でもみな集めてきた〉からです。悪人でも、善人でも、とにかく婚宴の席に連れてこられ、用意された席はいっぱいになりました。彼らは、思いがけず豪勢な喜びの席につくことになりました。王のもとに呼ばれ、そこで喜びを

ともにするということはいかに幸いなことでしょうか。彼らの姿こそは、契約の民でもなかったのに、恵みによってイエス様のもとに集められた私たちの姿です。

三、放り出された人

いよいよ婚宴がはじまります。王が客を迎えようと入ってきます。これはクライマックスです。喜ばしくも身が引き締まる厳かな場面です。

王の目はその場にいる多くの中の、一人に留（と）まります。彼は、礼服をつけていませんでした。王は招いた者たちのために服を用意し、ほかの人々はその礼服を着ていたのに、この人だけがそれを受け取ることをしなかったのです。なぜでしょうか？

王は、この人に〈友よ〉と呼びかけ、礼服を着なかった理由を問いかけます。しかし、この人は黙っているばかりです。正当な理由はなかったのです。ただ王を拒んで、敬うことをせず、彼のための礼服を着ようともしなかったのです。

マタイ伝では、「友よ」という問いかけが三回でてきます。一回目は20章でぶどう園で朝早くから働きながら、1デナリしかもらえず主人に文句を言った者たちに。二回目はこの個所。三回目は、ゲツセマネの園で、イエスを捕らえるために口づけをして裏切ったイスカリオテのユダに対して。ある注解者は、招きに応えながらもイエス様を拒んだイスカリオテのユダのことが、このたとえでも語られているのではないかといいます。神の招きに応じながらもなお心をかたくすることがあります。そのような者になお神は愛と忍耐をもって「友よ」と呼びかけてくださるのです。それでも拒むなら、外に放り出されるしかありません。それは自分で選んだ道です。

神に呼ばれ、招かれた者たちは、それにふさわしい装い、ふるまいが必要です。なんでもゆるされていますが、何をしてもよいというわけではありません。「キリストに合うバプテスマを受けたあなたがたは、皆キリストを着たのである」（ガラテヤ3・27）。

結論

恵みによって、招かれた私たちです。神の招きにふさわしく、私たちも神の用意してくださるキリストを着るものとなりましょう。

研究資料

（宮澤清志）

この物語は、ルカによる福音書の「盛大な宴会のたとえ」（14・16〜24）との類似点が指摘される。しかし、その類似点よりも、より多くの相違点のゆえに、この両者は別々のものであると考える見方がある。よってここではマタイの文脈から考えてみる。

テキスト

1　もう一度　イエスはそれまでにも、「二人の息子のたとえ」（21・28〜32）、「悪い農夫たちのたとえ」（21・33〜46）と、二つのたとえを語られてきた。それらの主題は、神の国は、異邦人や罪人をも含めた新しいイスラエルに与えられるということであり、今回のテキストによってその主題がさらに明瞭にされる。

2〜5　マクニールは、この第一部の比喩として、王＝神、王子＝イエス・キリスト、婚宴＝キリストとその教会の結合を表す象徴的表現、であるとしている。**招かれていた人たち**（2）　前もって招待状を受け取り、それを受け入れていた客だと思われる。もう少し具体的には「その名をもって呼ぶ」という意味の言葉が用いられている。つまり、具体的にはこの時点で王である神は既にこれらの人々を招待し、また人々も自らの意思表示をしていたというのである。3節の表現は、王である神は、そのような人々に対して再度の招きをしたということである。**しもべたち**（3、4）　とは、旧約時代の預言者を指すものと思われる。**知らぬ顔をして**（5）　「それに心を用いなかった」「心がそちらに向かなかった」という意味の言葉である。では何に心が向いているかが語られているのが「自分の畑」であり「自分の商売に」ということである。これは、この世のわざにのめり込んで神の招きを断る人々の不遜な姿が描かれている。自己優生的な態度は、神の招きに対して自らその道を閉じるという結果を招来するのである。

6〜7　この個所は、5節までの筋書きにはおよそふさわしくないという理由から、ある者は後代の挿入であるという見方や、また別には寓話的解釈をする見方等、いくつかの可能性が指摘される。一方、5節までの流れの当然の発展と見る見方もある。いずれにしても、王である神が、「まず恵みを受けよ」とせっかく招いた最初の客人たちが、いかに不実で忘恩的であったかを物語る意味

では、当然ここに描かれるべきものであったのであろう。その招きを拒む者の結果は裁きである。

なお、この個所の出来事を、紀元70年に起こったローマ軍によるエルサレム陥落を指すとみる見方もある。

8～10　2～5節に続く第二の物語である。あくまでも、全体の主題は「神の恵みを受けよ」ということであって、その主題はここでも同じである。しかし、その「招き」の範囲は、これまで招きに与っていたユダヤ人から、ユダヤ人を含めたすべての人々へと移行する。その結果、**婚宴の席は客でいっぱいになった**（10）のである。**ふさわしくない人々であった**（8）　王の丁重な招きを、悪意と反逆をもって拒絶したことを指す。**悪人でも善人でも**（10）　ここでは倫理的・道徳的な意味での「悪人」「善人」という意味合いである。神の招きは倫理的・道徳的な「正しさ」は問われない。すべての民が招かれているのである。

11～14　この物語の第三部。いよいよ王が祝宴に臨む大切な場面である。このたとえのポイントは、招待した王がその宴席にふさわしい礼服を着せてくれる、その礼服を喜んで受けるか、それとも自分の持ち合わせのものに固執するか、という点にあるようである。**礼服**（11）この場合、礼服とは、各自が持参するものではなく、王宮で王から貸し与えられた着物であるという理解がある。この者は、王から貸し与えられた礼服を拒否して王の前に出て、その威光を傷つけたというのである。王の招きに対する拒絶を意味するというのである。一方この礼服は、キリストを着ることであり（ガラテヤ3・27）、新しい人を着ることであり（エペソ4・24）、信仰によって与えられる「義の衣」である（イザヤ61・10）との見方もある。あるいは適切な生活の変化という者もある。それらの者に弁解の余地はない（12）。**招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない**（14）　最後の一文は、深い意味を持つ言葉である。畑や商売に行った者たちは「招待されて」いたが「選ばれ」なかった。また、通りから「招かれ」た者たちの中に、一人「選ばれ」なかった者がいた。いずれもその最終的な責任は自らが負うのである。

参考図書　R・T・フランス『ティンデル聖書注解　マタイの福音』、増田誉雄『新聖書注解新約1　マタイの福音書』（いずれもいのちのことば社）、他

5日 礼拝メッセージ例

聖　書　マタイ22・1～14
タイトル　天国への招き
暗唱聖句　招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない。　マタイ22・14
目　標　神の招きにお応えして、天国の幸いを知る者となる。

導入

（飯田勝彦）

イエス様は、私たちに神様の恵みと真理が分かるように譬えを用いてお話しされました。今回は天国についてです。

天国は喜びが満ちている

みんなは天国について考えたことがありますか？　案外、普段の生活では意識しないことだと思います。でも、身近な人の死に接したり、お葬式に行ったりすると「死んだらどうなるのかなぁ。天国ってあるのかなぁ。もしあるとしたらどんな所だろう」と考えることありませんか？

イエス様は、天国のことを話されるとき婚宴を譬えにされました。婚宴とは結婚式のあとに行われるパーティーです。皆が綺麗な服を着て、美味しい食事を食べたり、歌を歌ったりして新郎新婦を心からお祝いします。そこには、満面な笑顔と喜びが満ちています。聖書の中には天国は賛美が溢れ、涙も悲しみも苦しみもないと記されています。さらに、死もないとあります。ですから、天国は永遠に続く喜びで満ちているところなのです。

天国にあなたは招かれている

皆さんは、結婚式や友だちの誕生日会に招かれたことはありますか？　中には自分の誕生日会にお友だちを招いたことがある人もいるでしょう。

今朝の個所では王が王子のために婚宴を計画し、多くの人を招いていたことが記されています。でも、招いていた人が来ようとしなかったのです。招いた王はどんな気持ちだったでしょうか。王は「来ないから仕方ないや」とあきらめず、僕たちを遣わして「さあ、婚宴の準備はととのっているからいらしてください」と招待客に声をかけたのです。しかし、王からせっかく招かれていたのにその招待客たちは僕らを無視したり、仕事に戻ったりしたのです。そして、その他の客たちは僕たちをつかまえて殺しました。何とひどいことをしたのでしょうか。

王はあきらめないで招待客を招いたにも関わらず、彼らはそれに応えず、逆に反抗したのです。この招待客たちは王から招かれていることの恵みが分からなかったのです。それに対して王は怒りを表しました。この怒りの背後には恵みを理解してもらえない王の悲しみがあったことでしょう。

皆さんは今、神様から天国へ招かれています。この招きに対してどのように応えますか？

天国に入る備えを神様はあなたにしておられる

すでに招かれていたすべての客は、王の招待に応じませんでした。そこで王は、僕たちに「婚宴の用意はできているが、招かれていたのは、ふさわしくない人々であった。だから、町の大通りに出て行って、出会った人はだれでも婚宴に連れてきなさい」と命じました。僕たちはさっそく通りに出かけていき、見かけた人を集めて来ました。すると婚宴会場はいっぱいになりました。

そこで王が集まってきた客を見ようと会場に入ると、礼服を着ていない者がひとりいました。集められた者は、通りで急に声を掛けられたので礼服の用意ができていないのは当たり前です。この礼服は、王宮で王から与えられるものでした。しかし、このひとりの者は、礼服が与えられたにも関わらず、自分からそれを着なかったのです。

この者は、王の婚宴に招かれ、しかもその婚宴に相応(ふさわ)しい礼服まで備えられていたのにも関わらずそれを拒んだゆえに「この者の手足をしばって、外の暗やみにほうり出せ。そこで泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう」と言われてしまったのです。

王なる神様は、あなたを天国へ招き、同時にそれに相応しい礼服を備えておられます。それが、イエス・キリストの「義の衣」です。

まとめ

王なる神様は、あなたを天国へ招いておられます。そして、そこに入るためにキリストの「義の衣」を備えておられます。これは、キリストを自分の救い主と信じる者には、誰(だれ)にでも与えられる礼服です。

あなたは「義の衣」である礼服をすでに着ていますか？

♪感謝と喜びを♪

（プレイズ＆ワーシップ合本楽譜集Ⅰ 173）

聖　書　マタイ25・1～13
テーマ　主の再臨に備える

（金井信生）

序論

今日は、「十人のおとめ」のたとえを通してイエスの教えられた、世の終わりに対する日々の心備えを学びます。

一、花婿を待つ

イエスは「場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう」（ヨハネ14・3）、「しかり、わたしはすぐに来る」（黙示録22・20）と約束されました。それは「小羊の婚宴」（黙示録19・9）すなわち、花婿であるキリストが、教会を花嫁として迎えられる日です。

イエスの話す譬えにも、神の国を宴会に譬え、用意が整ったら客を招く話がいくつもあります。喜びの宴が備えられていることと、その時が来たら招きに直ちに応じることを、いつもおぼえていることが大事です。

今日の譬えでは、花嫁に付き添うおとめを通して、キリストを待つ心の備えが教えられています。今はまだ、準備の時であり、忍耐の時です。しかし、やがて訪れるのはすべての労苦から解き放たれ、喜びが満ちる日です。私たちは過去を待つのでも、今を待つのでもなく、主の言葉に従って約束の日を待つのです。

二、待つ者の備え

おとめたちは〈あかり〉を手にして待っています。現代のように、「そろそろ近づいたから」と事前に連絡が来るわけではありません。いつ来られてもいいように、〈あかり〉を常に手にしていなければならないのです。イエスは「あなたがたは世の光である。…あなたがたの光を人々の前に輝かし」（マタイ5・14、16）なさいと教えられました。私たちは霊的な暗黒に閉ざされ、行き悩んでいる世にあって、真理の光、命の光を輝かせ続けるように導かれている者です。

また、これも現代と違って、〈あかり〉はたいまつであってもランプであっても、燃料を補わないと、すぐに消えてしまいます。「油断大敵」という言葉をすぐ思い出すようなたとえです（本来の語源は少し違うそうですが）。

私たちの信仰生涯を、いつも輝いたものにするにはど

うしたらいいのか、ここには〈油〉を用意していた者と用意していなかったものとに分かれています。

〈油〉は、聖書の中ではしばしば聖霊を象徴しています。旧約時代の王や祭司、預言者は頭に油を注がれて、神の霊に満たされるべき職務に任じられました。

ここでは、「輝き続けなさい」と命じられる主が、輝くための必要を、常に満たし続けてくださっていると受け止めてよいでしょう。主の臨在を忘れて、周囲の波風におびえたり、空しい楽しみに心を奪われていると、すぐに闇に飲み込まれてしまうような私たちです。主からの喜びを、希望を日々いただくよう、賛美と感謝、祈りとみ言葉にあふれた歩みに励みましょう。

三、目をさましていなさい

〈目をさましていなさい〉とは、おとめたちが居眠りしてしまったことを責めているのではありません。イエスは、私たちが弱い存在であることをご存知です。ただ、あかりを手にしている意味を、また輝かせ続ける必要を意識しているかどうかを問うておられます。これは人任せにはできません。一人一人が、キリストの救いを自分のものとし、恵みをおぼえることです。

結婚を二人が決めるのは一つの時点ですが、実際の結婚式に、またその後の生活のための準備はしばらくの期間があります。

キリストの救いも、救われたときから主と共に歩み始め、恵みに満たされて光を放って行くように導かれています。備えのない者への厳粛なさばきは確かにあります。備えているつもりでも、風が吹いたり、油が切れそうになってあわてることもあるかもしれません。だからこそ、共にいてくださる主にすべてを委ね、日々み言葉に従っていくなら、主が私たちを守り支えてくださいます。

結論

うれしいときもかなしいときも、主と共に歩み続けるよう、霊の目を覚まして、主のご再臨に備えましょう。

研究資料

（中島啓一）

「忠実な思慮深い僕（しもべ）」（24・45）として、主の来臨を待ち望むべきであることを教える前章を踏まえ、この章では、まずこの「十人のおとめのたとえ」（1〜13）を通して「思慮深さ」の面が、続く「タラントのたとえ」（14〜30）を通して「忠実」であることが扱われる。

テキスト

1 花婿　キリストを指すことは明白だろう。**十人のおとめ**　婚礼の一連の行事の間中、花嫁に付き添い世話をする女性たち。教会はキリストの花嫁にたとえられることが多いが、ここでは、主の再臨を待ち望む教会（あるいはクリスチャン）を、花嫁にではなく、この付き添いの女性たちにたとえている。**天国は…に似ている**　天国は単なる来世のことだけではない。マタイ福音書の言う天国は、ルカ福音書の神の国（神の支配とも訳すことができる）に相当する。それはキリストの降誕によって既に地上にもたらされ（ただし未完成）、やがて終末の時に完成するものである。再臨までの「教会の時代」は、その「既に」と「未だ」が混在している状態である。そんな中間の時代にあって、再臨を待ちながら過ごすクリスチャンの心構えをイエスは教えるのである。**あかり**　棒にぼろ布を巻き付けた松明（たいまつ）かもしれない。この種の松明の布は短時間で燃え尽きてしまい、その都度、別の布で包み直し、油を含ませねばならなかった。**花婿を迎えに出て行く**　少し後の時代のものだが、パレスチナの一般的な結婚式の手順が知られている。まず夜の祝宴に向けて、花婿が花嫁を迎えに来る。その花婿を花嫁の付き添いの女性たちが外に迎えに出る（花嫁は家の中にいたまま）。そして新郎新婦と付き添いの女性たちが行列をつくって花婿の父の家まで進んでいき、そこで祝宴が開かれるのである。時代は少し異なるが、このたとえの婚礼もほぼそのような手順であったと考えられる。

3 思慮の浅い者たちは、あかりは持っていたが、油を用意していなかった　花婿を待っている間も火をともしておくのか、それとも到着の報を聞いてから火をつけるのかはわからない。いずれにしても大事なことは、彼女たちは（時間どおりであろうが遅れようが）花婿が到着したならば、その時から始まる大事な役割に備えて、油を十分に用意しておく必要があったということである。

4　思慮深い者たちは…油を用意していた　万一に備え油を用意していたことが「思慮深い」と呼ばれる理由である。油は聖霊を象徴するものとされるが、ここでもそう捉えてよいだろう（ただし、そこまで意図されていないとする注解者もいる）。

5　彼らはみな居眠りをして、寝てしまった　思慮深い者たちも寝てしまったことに注意。「目をさましていなさい」（13）というこのたとえの結論からすると、彼女たちにも落ち度があるようにも思えるが、彼女たちは叱責を受けずに、その後の役割を果たし、祝宴の恵みにあずかっている。

6　夜中に…呼ぶ声がした　「思いがけない時に人の子が来る」（24・44）とあるとおりである。

8　あかりが消えかかっています　「悪しき者のともしびは消される」（箴言13・9、ヨブ18・5参照）のイメージが背後にあるのかもしれない。

9　わたしたちとあなたがたとに足りるだけは、多分ないでしょう　分け合うならば全員の油が不足し、結婚式が台無しになってしまう。主の再臨に備えておくという信仰の姿勢は、他の誰かと貸し借りできるような類のものではないのである。

10　用意のできていた女たち　婚宴の部屋に入ることができたのは「用意ができていた」からであった。**戸がしめられた**　救われる者と滅びる者とがひとたび定まれば、もはやそれを変えることはできない。

11　ほかのおとめたち　花婿の遅れに備えていなかったばかりに、婚宴の部屋から閉め出された彼女たちは、今や「その他」の存在に落ちぶれた。

12　わたしはあなたがたを知らない　最後の審判の厳粛さを思い知らされる言葉（7・23参照）。

13　目をさましていなさい　前述のように、思慮深い女たちも眠っていたが、それはこの警句と矛盾しない。彼女たちは来たるべき時への備えが十分にできていたゆえ、祝宴に連なることがゆるされたのである。クリスチャンは再臨に備えて、日常生活に支障がでるほど気を張り詰めている必要はない。ただし霊的には目を覚まし続け、そのことによって準備が整っていることに安心し、平安のうちに再臨を待ち望み続ければよいのである。

参考図書　10月15日分と同じ。

12日　礼拝メッセージ例

聖　書　マタイ25・1～13
タイトル　主の再臨に備える
暗唱聖句　目をさましていなさい。その日その時が、あなたがたにはわからないからである。　マタイ25・13
目　標　霊の目を覚まして、主のご再臨に備えた生き方をする。

（土屋開夫）

導入

今年もあっという間に11月。そして、もうしばらくすると、もうアドベントに入ります。教会の先生たちはそろそろアドベントのロウソクを買いに行かなければなりません。でも、たまにうっかりしていて、「しまったっ。新しいロウソクを買うのを忘れていた！　去年、使った短いロウソクしかない！」なんて慌てる事もあるかも知れません。私だけでしょうか。短いロウソクでは礼拝の途中で消えてしまうかも知れませんね。

今日はそんな「うっかり」していた女性と、「しっかり」していた女性の譬（たと）え話です。

油を用意していた女性と、していなかった女性

イエス様がこの世の最後の時期に、再び天から地上に来られる事を「再臨」と言います。その時、イエス様は、イエス様を信じて待ち続けていた人たちを天国に迎えて下さるのです！　先生もその日をドキドキ、ワクワクしながら、いつも楽しみに待っています。

イエス様はその「再臨」の時の事を色んな譬え話で教えて下さいました。その一つが今日の譬え話です。

当時のイスラエルでは結婚式のパーティーをする際、花婿さんとお友達が、花嫁さんの家に、花嫁さんとそのお友達を迎えに行きました。普通は夕方頃に迎えに行くのですが、遅くなる事もあったようです。ですから女性たちはランプを持っていないといけません。それに今のライトのように点けたり消したり、簡単には出来ません。一度つけたら、大事にその火を灯し続けるのです。そして、火を灯し続けるには油が必要なのです。

さて、この時は花婿さん達が迎えに来るのがとても遅くなって、なんと夜中になってしまいました。花嫁さんのお友達は待ち疲れて眠っていました。でも突然「さあ、花婿だ、迎えに出なさい！」と合図の声がしました。

お友達のうち5人は、ランプの油をちゃんと多めに用意していましたが、他の5人は用意していませんでした。きっと花婿たちがすぐ来ると思っていたからでしょう。ランプの明りが無ければ、暗い夜道は歩けません。油を慌てて買いに行きましたが、もう間に合いません。花婿さん達は、油をちゃんと用意していた5人の女性たちを連れて結婚パーティーに向かいました。そして部屋の扉は閉められ、後の5人の女性たちは入れてもらえませんでした。

イエス様を信じ続ける心

イエス様はこの譬え話によって何を教えておられるのでしょう？　花婿はイエス様の事です。花嫁のお友達は、イエス様を信じている私たちの事です。そしてランプの灯火は、イエス様を信じる心「信仰」の事です。では、油は何でしょう？　それは「イエス様を信じ続ける心」です。いつも信じている、そしていつまでも信じている心です！

もし、私たちがイエス様を信じる「信仰」が、短ーいロウソクのようだったらどうでしょう？　今は点いているけど、やがてスグ消えてしまうでしょう。子どもの今はイエス様を信じていても、中学生、高校生…、大人になったら信じる心の火が消えているかも知れません。もし、そんな時に突然イエス様が天から迎えに来られたら、天国での素晴らしいお祝い会に入れてもらえなくなってしまいます！　そんな事になったら大変ですね！

そうならないためには、ずーっとイエス様を信じ続ける心を持つ事です！　私たちはいつも息をし続けています。また毎日、ご飯を食べ続けています。そのように続けることは「生きること」です。聖書を読み続け、お祈りをし続け、日曜日の礼拝も、大人になってもずっと続けて下さいね！

まとめ

助け主である聖霊様は、私たちがイエス様を信じ続ける力を与えて下さいます。どんなに遅くなってもイエス様は必ず迎えに来られます。聖霊様の力によって、皆でイエス様をずーっと信じ続けましょう！

♪歩こうイェスの道を♪（PW15、イン81）

聖　書　マタイ25・14〜30
テーマ　タラントの譬（たとえ）

（小泉　創）

序論

世の終わりについて、イエス様が弟子たちに教えられている場面です。主人が旅に出るときに、3人のしもべたち（いわゆる奴隷というより、責任と自由があたえられた従業員のような存在）に財産を任せます。

一、しもべたちに任された財産

3人のしもべたちには、任された額がそれぞれ異なっていました。ひとりは5タラント、もうひとりは2タラント、最後のしもべは1タラントを任されました。なぜ主人は、それぞれのしもべに異なった財産を任されたのでしょうか。その理由は聖書に書いてあります。〈それぞれの能力に応じて〉です。みんな能力が異なっていたので、主人はそれぞれの能力に見合った財産を預けたのです。

私たちも何につけ他の人と比べ始めると、ろくなことにはなりません。なんであいつばかりなどとはじめても、何も良いものは生まれません。すべての人が違うのですから、任されているものも当然違います。能力が違うのに同じ責任が与えられるならその方が不公平です。任されているものが違うということは、実は主人が公平な方であることの証拠です。神様は私たち一人一人にふさわしいことを任されています。

二、一緒に喜んでくれ

主人が帰ってきました。決算の時です。5タラント渡された者が商売でもうけた5タラントを差し出すと主人が言いました。〈良い忠実なしもべよ。よくやった。あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させせよう〉と。しかし5タラントはわずかなものではありません。おおよそ三万日、すなわち80年分の給料に相当する金額です。5タラントがわずかであるなら、さらに多くのものとはいったいどれほどのものでしょうか。

2タラントのものにも主人は同じ言葉をかけます。〈良い忠実なしもべよ。よくやった〉と。主人は能力に応じて与えられたものに忠実になしたことを評価してくれるのです。〈主人と一緒に喜んでくれ〉とまるで同労

者のように、声をかけています。主人はしもべたちに働きを与え、一緒に喜ぼうとしていたのです。

三、主人はどのような者か

問題は1タラントのしもべです。彼は地面に埋めておいた1タラント（16年分の給料）を掘り出してきてこういいます。〈ご主人様、わたしはあなたが…酷な人であることを承知していました〉。このしもべにとって主人は、自分の持っている物をむしりとっていくような無慈悲な人だというのです。自分には1タラントしか任されていないのに、きっと何倍もの成果を求められるのだ。失敗したらどんな目にあわされるかわからない。それならむしろ何もしない方がよい。主人が厳しい方だから、自分は力を発揮する余地がないのだ…。しかし、この主人はそれぞれのタラントに応じた働きを喜んだのですから、1タラントのしもべも1タラントの働きでよかったのです。

時に私たちはあまりにも多くのものを要求されていると思ってストレスを抱えることがあります。完璧に、全部しなければならないと要求されているように思うこともあるかもしれません。自分自身にも、他の人にも、厳しすぎることがあるかもしれません。

この1タラントの人を反面教師としましょう。

・与えられている能力を、生かさずに地に埋めたりしない。積極的に活用する。
・人と比べて、わたしのこのようなことが何になるのかなどといわない。
・主なる神様を恐ろしい、ないところから奪い取るお方ではなく、能力と使命を与え、一緒に喜んでくださる方として信頼する。

結論

このたとえは、再臨のときを指し示しています。そのときに私たちの人生の決算のときがあります。イエス様から、よい忠実なしもべよ、一緒に喜んでくれと声をかけられたなら、どんなに幸いでしょうか。

私たちに与えられている能力を、神様の為に、そして人の為に生かしましょう。失敗をしないようにではなく、主がお帰りになる日を思いつつ、生き生きと働く忠実なものとしていただきましょう。

イエスはここで、再臨を待ち望む御国の民がどのような歩みをすべきかを教えられた。それはただ待っているという受け身の生き方ではなく、ひとりひとりに与えられた賜物を活用する生き方である。ここに忠実な生き方が問われている。

（小平徳行）

研究資料

テキスト

14　ある人　御国の王であるイエスを指す。**その僕ども**「自分の奴隷たち」の意で、御国の民を指している。奴隷というと全く自由のない、人格を完全に無視された存在を想起しがちだが、ここに出てくる僕はかなりの自由と裁量権が与えられている。**預ける**「引き渡す」の意。裁量権の一切を任せたということである。僕に対する主人の信頼と期待とを感じさせる。**旅に出る**　イエスが地上の使命を終えて、天の御座に着かれること。19節の「帰ってきて」は再臨を指す。

15　それぞれの能力に応じて　主人は僕たち一人一人をよく知っていた。**ある者には五タラント、ある者には二タラント、ある者には一タラントを与えて**　御国の民は皆違った賜物を受けている。それは自分のためにではなく神の御国のために働くことを期待されて預けられたものである。**タラント**　もともと重さの単位であったが、貨幣の単位に変わっていった。一般に一タラントは六千デナリとされ、一デナリは労働者一日分の賃金とされている。すると一タラントは六千日分、つまり16年分ほどの給料である。こうしてみると一タラントといえども極めて高額であった。

20〜23　忠実な（ギ ピストス）「信用できる」の意。**わずかなものに忠実であったから**　五タラントもうけた者にも、二タラントもうけた者にも同様の評価をしている。主人は僕の忠実さに目をとめている。五タラント、二タラントは、僕の立場からすれば非常に高額であるが、主人からすれば「わずかなもの」であった。**多くのものを管理させよう**　預かったものが「わずかなもの」であるならば、「多くのもの」とは想像しがたい莫大なものである。キリストと共に天の御国を支配する特権の大きさを思わせる。**主人と一緒に喜んでくれ**　直訳「あなたの主人の喜びに入れ」。忠実な僕にとってキリストとは「あなたの主人」ということのできる特別な関係にあるゆえ、

この喜びは、業績をもたらしたことの一時的な喜びでなく、主人との永続的な交わりのもたらす喜びである。

24～25 一タラントを預かった僕がそれを活用しようとしなかったことの弁解がここになされている。**わたしはあなたが、まかない所から刈り…** ここにこの僕の主人観が表されている。それは無理難題を押し付けて、理不尽な要求をする主人というものであった。キリスト者の歩みにおいて、神観は大きく影響する。**恐ろしさのあまり** この僕が一タラントを地の中に隠したのは、失敗をするならひどい仕打ちを受けるに違いないと考え、何もしない方が無難だとの判断による。預け主の期待よりも、自分を守ることを優先した。この僕に主人の愛も信頼も通じなかった。彼の内にあるのは恐怖と不信だけである。彼は一タラントを感謝せず、迷惑な重荷であると受けとめ、預け主の意思を踏みにじった。

26～27 怠惰な〔ギ〕オクネロス) この語源は〔ギ〕オクネオー「躊躇(ちゅうちょ)する」で、判断や決断ができないために行動することができない優柔不断な姿を指している。**銀行に預けておくべきであった** ローマ帝国の支配下の地域では銀行はかなり普及しており、利子も結構高かったという。主人が帰るまでの期間は長かったゆえ、相当の利息がついたはずである。それだけにこの僕の怠けぶりは徹底していた。

29 おおよそ、持っている人は与えられて、いよいよ豊かになるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられるであろう これは当時よく知られていた格言で、イエスは他でも語っている(13・12、ルカ19・26他)。これは社会的、経済的原則であると共に、霊的世界にも当てはまる。与えられているものを用いるなら、それはますます増し加えられ、用いないなら、あるものまで失われてしまう。真に価値あるものは、用いることによってのみ所有し続けることができる。神はキリスト者が、それぞれに託されたものに忠実に生きることを求めておられる。

30 泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう 不敬虔な人の究極の運命を示すユダヤ教の伝統的な表現(8・12、22・13等)。

参考図書 中澤啓介『マタイの福音書註解』、増田誉雄『新聖書註解・新約1』、(以上、いのちのことば社)、織田昭『マタイによる福音書』(松本工房)、他。

聖書	マタイ25・14〜30
タイトル	タラントの譬
暗唱聖句	良い忠実な僕よ、よくやった。 マタイ25・21
目標	与えられた賜物を生かして、神に仕える者となる。

（土屋開夫）

導入

テレビのバラエティー番組などに出る人を「タレント」と言いますね。それは「才能ある人」という意味で、今日の聖書個所にも出て来る「タラント」というギリシャ語からきている言葉です。それは当時のお金の単位の一つで、1タラントは今の日本のお金でいうと、およそ6千万円にもなります。という事は、2タラントは1億2千万円、5タラントなら3億円！

でも今日の聖書のお話は、お金の事を言っているのではありません。父なる神様が、みんなに素晴らしい才能をたっぷり与えておられるという事なのです！　でも大事な事は、そのタラントを「使う」という事なんです。

それぞれタラントを預かった僕(しもべ)

先週もイエス様が「再臨」の時の事について語られた譬(たと)え話でした。「再臨」って何だか覚えてますか？　そう、この世の終わりの時代、イエス様が天から再び来られて、イエス様を信じて待っていた人たちを天国に迎えて下さる事です。今日の譬え話もその時の事です。

あるご主人が旅に出る時、3人の僕たちにそれぞれ5タラント、2タラント、1タラントの財産を預けました。それはその財産を「ただ大事に持っていろ」という事ではなく、「それをよく使いなさい。増やしなさい」というご主人の願いでした。

「そんなにたくさんの財産を預けられても困る！」とみんなは思うかも知れませんね。あるいは「お金の額に差があってズルイ！」と思うかも知れません。でも「それぞれの能力に応じて」と書いてあります(15)。ベテランの僕もいたでしょうし、新米の僕もいたでしょう。ご主人は、一人一人の事をよく分かっていて、無理なく使いこなせる分のタラントを、信頼して預けたのです。

そして5タラント預かった僕も、2タラント預かった僕も、その財産をよく活かし、よく働いて倍に増やしま

した。ところが1タラント預かった僕は、そのタラントを全く使わず、地面の中に隠しておきました。

ご主人が長い旅から帰って来た時、僕たちの会計報告を聞き、正確に計算しました。そして、5タラント、2タラントを預けた僕に「良い忠実な僕よ、よくやった」と褒めて下さいました。それぞれ自分の能力とタラントに応じて、ご主人のために忠実に働いたからです。

ところが1タラントを預かった僕は、タラントを全く使わなかった言い訳をしました。「恐かったのです」と。この僕は「悪い怠け者の僕だ」と叱られ、お屋敷の外に追い出されてしまいました。

キミのタラントは何だろう

この譬え話の意味は何でしょう? ご主人はイエス様の事です。僕たちは私たちです。ご主人が帰ってくる事は「再臨」の事です。私たちはイエス様が地上に帰って来られる「再臨」を、何もしないでただ待つのではありません。イエス様から一人一人に預けられたタラントを、ご主人であるイエス様のためにフル活用するのです!

そう言うと「ボクにはなんの力も才能もない…」っていう子がいるかも知れません。でもイエス様からタラントを与えられてない人は、一人もいません。まだその素晴らしいタラントに気づいていないだけです。

ここでみんなに二つ質問します。考えてみて下さい。

①「あなたの好きな事は何ですか?」どんな小さなことでも、好きな事はタラントにつながります。

②「あなたはイエス様のため何ができると思いますか?」

今日の個所のすぐ後でイエス様は言われました、「これらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」(マタイ25・40)。だから、誰かのために何か良いことをするのは、イエス様にする事と同じなのです。

まとめ

お友達にイエス様を紹介する? 誰かのためにお祈りする? おばあちゃんのお見舞いに行く? イエス様から「よくやった! グッジョブ!」って褒めてもらえるように、失敗を恐れず、良い事を実行してみよう!

♪主は僕らを用いてくださる♪(PW59)

聖書　詩篇145・8～16
テーマ　日々の糧を与える神
（石田高保）

序論

収穫感謝礼拝にちなんで、神様に感謝することについて思いめぐらしたいと思います。そもそも神は私たちの生活に対してどのような関心をお持ちなのでしょうか。

一、神様の綿密なご配慮

まず第一に言えることとは、神様は私たちの生活が成り立ってゆくために多大な関心を示し、万全の配慮をしておられるということです。〈主は恵みふかく、あわれみに満ち、怒ることおそく、いつくしみ豊かです〉、神様のご配慮の全貌を私たちは見ることはできず、わずかにその一端を垣間見ることができるだけです。私たちが生きる上で必要とするものは、神様が全部備え、満たしてくださいます。イエス様は「天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らして下さる」と、そのことを明らかにしておられます（マタイ5・45）。

人間の生活を成り立たせようとする神様のご配慮は、クリスチャンであるかないかにかかわらず、全人類に及ぶもので、一般恩寵と言われます。〈よろずのものの目はあなたを待ち望んでいます。あなたは時にしたがって、彼らに食物を与えられます〉。これは人間だけでなく、生きとし生けるものすべてを覆う広大無辺な恩恵です。クリスチャンだけに神様のご配慮があるのではなく、無関心な人々にも例外なく及んでいます。父なる神としてすべての人間を愛し、いつくしんでおられ、どのような行状であってもこの恩恵から漏れている人はこの地上に一人もいません。まして信仰によって神の子どもとされたクリスチャンは、なおさら必要が満たされることを確信して安らぐことができるのです。

それにもかかわらずイエス様は「わたしたちの日ごとの食物を、日々お与えください」と祈るように言っておられます（ルカ11・3）。それは一つには私たちのうちに神様への感謝が増し加わるためではないでしょうか。事の大小にかかわらず、事あるごとに祈れば、かなえられたときに、自力ではなく神の恵みによることを確認することになります。

二、感謝することの祝福

第二に言えることは、神様に感謝することが私たちに祝

福をもたらすということです。そもそも感謝できること自体が祝福ではないでしょうか。たとえ自分は感謝が足りないと思ったからといって、神様の愛が細るわけではありませんが、事あるごとに感謝するならば、神様の愛がよりわかってきます。神様は、私たちの欲しいものをくださるとは限りませんが、必要とするものはことごとく与えてくださいます。〈主よ、あなたのすべてのみわざはあなたに感謝し、あなたの聖徒はあなたをほめまつるでしょう〉、感謝することは、神様への賛美につながるということでしょう。この場合の賛美は歌うことだけではなく、思いや言葉において神様をあがめることです。神様を神様であるがゆえにほめたたえるということは、クリスチャンになりたての人にはわかりにくいことでしょう。しかし祈りにこたえてくださったことのゆえに感謝することはなじみやすいと思います。そのように感謝することが身についてくると、神様が生きておられることのゆえに賛美することもわかってくるのではないでしょうか。

また「神の造られたものは、みな良いものであって、感謝して受けるなら、何ひとつ捨てるべきものはない」（Ｉテモテ４・４）とありますので、私たちは何の宗教的なタブーもなく食を楽しむことができます。もちろん「すべてのことが益になるわけではない」という側面も顧みなければなりませんが（Ｉコリント６・12）。

さらににわかには感謝できないことに対してもする感謝することができます。「わたしは、どんな境遇にあっても、足ることを学んだ。…ありとあらゆる境遇に処する秘けつを心得ている」（ピリピ４・11、12）、つまり足ることを知る、です。タラントのたとえによれば、神様は私たちの管理能力にしたがって、霊的、物質的な富を任せておられることがわかります。これは主の再臨後に現れる千年王国でクリスチャンはそれぞれの賜物にしたがって人々の統治を任されることと関係があるようです。つまり私たちは後の世のために、いま与えられているものをいかに聖書的な価値観で使用するかが問われているのではないでしょうか。来たるべき世での奉仕に堪えるための霊的トレーニングなのかもしれません。

結論

以上のように生活の全領域にわたって綿密にご配慮下さる神様に感謝して歩んでまいりましょう。

（金井由嗣）

研究資料

アメリカの収穫感謝礼拝は、ピューリタン入植者が先住民の援助によって初めての収穫を得たことを感謝し、先住民を招いて共に祝った出来事に由来する。このストーリーがどこまで歴史的事実を伝えているかについては疑問の余地があるが、入植者が先住民に感謝して良好な関係を保っていた時期についての記憶を伝えることには意義がある。聖書は、収穫の喜びを祝う時には家族、同胞に加えて「寄留の他国人と孤児と寡婦」と共に「主の前に」喜び楽しむように、と命じている（申命記16・11～12、14）。自分で生活する手段を持たない人々や帰属する集団が異なる人々とも収穫物を分け合い、喜びを共有するように命じているのである。収穫感謝のメッセージが、神の名のもとに自分の利益を追求する「繁栄の神学」とならないように注意すべきである。

この詩の特徴と意義

145篇はヘブル語のアルファベット順に各行が始まる「いろは歌」である。この形式には記憶を助ける教育的な意味がある（石黒）。一方、この詩の表題には詩篇で唯一「さんび」〔ヘ〕テヒリームという単語が使われ、かつ表現・内容ともに146～150の5つの「ハレルヤ詩篇」の導入の役割を果たしている。詩篇には悲しみや悩みの詩が多いが、そのすべてを通った後で「神をたたえる」ことが詩篇の結論となっていることに意味がある（小林）。

テキスト

8　主は恵みふかく、あわれみに満ち、怒ることおそく、いつくしみ豊か　出エジプト34・6における神の自己紹介である。この詩の1～7節では神の偉大さがたたえられているが、8節からはその「大いなる神」がご自分の民に対して「恵みふかく」あることに焦点が当てられる。

9　主はすべてのものに恵みがあり　この詩では、21節の中に「すべて」〔ヘ〕コルが16回現れる（翻訳では様々に訳し分けられている）。創造主である神の働きが被造物すべてに及んでいる、とのメッセージを強調している。

そのあわれみはすべてのみわざの上にあります　「みわざ」〔ヘ〕マアセーは新改訳と新共同訳では「造られたもの」と訳されている。4節と同じ単語であるが4節では能動的な神の働き、9節と10節では神の働きによる被造物を指している。この両者に同じ単語が使われていることが

大事である。収穫の豊かさ以前に、我々の存在自体が神の創造によっていることへの感謝が捧げられている。

10 すべてのみわざはあなたに感謝し、あなたの聖徒はあなたをほめまつる　被造物は存在を通して神に感謝しているが、神を神として認識し、礼拝し、賛美することは神の民とされた「聖徒」の特権である。聖徒は全被造物に先駆けて「賛美の先陣を果たすべきである」（石黒）。

11〜12 彼らはみ国の栄光を語り、あなたの御力を宣べ、あなたの大能のはたらきと、み国の光栄ある輝きとを人の子に知らせるでしょう　聖徒の役目は賛美の先駆けを果たすことにとどまらず、賛美されるべき方をすべての人々に宣べ伝えることをも含んでいる。賛美と宣教は一体である。「み国」〔ヘ〕マルクートは新共同訳では「あなたの主権」と訳される。死んでから行く「天国」ではなく、この世界における神の主権を表す「神の国」である。

13　この節では神の主権の永遠性が歌い上げられる。

14 主はすべて倒れんとする者をささえ、すべてかがむ者を立たせられます　神の主権（王国）の時間的永遠性に続いて、すべての人、特に社会的弱者に及ぶその主権の普遍性がたたえられる。「まことの王の統治は、武力や人間的な政治力によってではなく、むしろ弱者の救済と必要の満たしという方法でなされる」（石黒）。

15 よろずのものの目はあなたを待ち望んでいます。あなたは時にしたがって彼らに食物を与えられます　新共同訳は「ものみながあなたに目を注いで待ち望むと／あなたはときに応じて食べ物をくださいます。」と前後を連続させて訳す。原文の微妙なニュアンスを表現することに成功している。「時にしたがって」は、その時々の必要に応じて神が食べ物を与えてくださるという意味である。命を支えてくださる神への信頼を教えるとともに、不必要な蓄財や贅沢に対する戒めでもある。主イエスの山上の説教（マタイ6・25〜34）に通じる。

16　この節も同様のメッセージ。神の祝福は神の民だけに向けられたものではなく、「すべての生けるもの」に向けられている。神の民は率先して神を賛美することによって、他の人々を真の神への賛美と礼拝に招くよう召されているのである。

参考図書　森本あんり『アメリカ・キリスト教史』、鍋谷堯爾『詩篇を味わう』、石黒則年（新聖書講解シリーズ）、キドナー（ティンデル）、小林和夫（著作集8）。

聖　　書　詩篇145・8〜16
タイトル　神様、感謝します！（収穫感謝）
暗唱聖句　あなたは時にしたがって彼らに食物を与えられます。　詩篇145・15
目　　標　日ごとの糧を与えてくださる神様を覚え、感謝と信頼をもって生きる。

（松浦みち子）

導入

実りの秋です。お店には、さまざまな果物、野菜などが並べられていますね。天候などの関係で農作物が育たなかったら、飢饉となり困ったことになります。二〇一六年夏に北海道を台風が襲い、川が氾濫するという出来事がありました。その結果、ジャガイモが収穫できなくなり、みんなの大好きなポテトチップが販売終了や休止になっています。世界では飢饉で食べ物がない国がたくさんあります。ちょっと、胸に手をおいて考えてみましょう。

イエス様が教えてくださったお祈り

「主の祈り」を暗記してお祈りできますか？

「天にまします我らの父よ。
ねがわくはみ名をあがめさせたまえ。
み国を来たらせたまえ。
みこころの天になるごとく　地にもなさせたまえ。
我らの日用の糧を、今日も与えたまえ。
我らに罪をおかす者を　我らがゆるすごとく、
我らの罪をもゆるしたまえ。
我らをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ。
国とちからと栄えとは
限りなくなんじのものなればなり。　アーメン」

このイエス様が教えてくださった祈りの中で、「我らの日用の糧を、今日も与えたまえ」という祈りについて考えてみましょう。もし、あなたが病気になったり、心配事や悩みがあるなら、食事がのどを通らないことがあるでしょう。毎日の食事をおいしく食べられるのは、心も体も健康な証拠ですね。ですから、この祈りには心の平安と健康を守ってくださいという願いが込められています。また、「われらの」とありますから、自分だけのことでなく、飢餓で苦しんでいる人たちのことも覚えて祈ることも教えられます。そして祈るだけでなく、私たちが行動することにもつながってきます。この日用の糧

は、食べ物だけではありません。生活に必要なすべてのものも指すことがわかってきますから、ペットボトルのキャップを集めたり、さまざまなボランティア活動にもつながって、祈りが行動となってきます。

「今日も与えたまえ」と祈る時、イスラエルの人々の40年の荒野の旅のことを思い起こします。毎日マナが天から降ってきてその日に必要な糧が神様から与えられ、人々は飢えることなく旅を続けることができました。しかし、ある人が欲張って必要以上にマナを集めると、それは腐って食べられなくなりました。神様を信じ、一日一日を信頼して神様と共に生きるなら、全ての必要は満たされ感謝して毎日を過ごすことができるのです。

詩篇の中でダビデは次のように神様をさんびしています。「主はすべて倒れんとする者をささえ、すべてかがむ者を立たせられます。よろずのものの目はあなたを待ち望んでいます。あなたは時にしたがって彼らに食物を与えられます」（詩篇145・14～15）。

神様はなんとあわれみに満ち、いつくしみ深いお方でしょう。日々の糧を与えられる神様を信じ、感謝をもって従っていきましょう。

収穫感謝祭の起こり

収穫感謝祭は、アメリカやカナダの宣教師によって日本に伝えられてきました。その起りは、一六二〇年九月に、船員と102名の清教徒と呼ばれるイギリスのキリスト教徒たちが「信教の自由」を求めて「メイフラワー号」に乗ってアメリカ大陸に渡った歴史的出来事に関係します。彼らはアメリカ大陸に上陸したものの、厳しい冬のため多くの者は死にましたが、それにめげずに畑を開墾し、秋にはトウモロコシなどの収穫物を得ました。彼らは汗水を流して働いた人々と共に、植物を育て、成長させ、実りを与えてくださった神様に感謝をささげて礼拝をしました。それが「収穫感謝祭」の起こりです。

現在の日本の国は、外国からの多くの輸入によって食卓が支えられています。私たちが知らない多くの人々の支えがあって私たちは食事をいただいていることを忘れないようにしましょう。また、調理をしてくださる方にも感謝しましょう。飢えに苦しんでいる人々のためにも「神さま、どうぞ日ごとの糧を与えてください。」と祈りましょう。あなたの日々が感謝であふれますように。

♪わたしのように♪（ホ98、イン75）

聖書　イザヤ7・1〜17
テーマ　インマヌエル預言

序論

（石田高保）

ここは有名なキリスト降誕を預言した個所です。しかも預言者イザヤが記した時代は、そのことが実現する七百年あまり前でした。マタイはこれを引用して、イエス様の誕生こそその預言の成就であると断言しています（マタイ1・23）。これによって神のご計画は決して泥縄式でも思いつきでもなく、その実現は確実でしかも遠大であることを教えられます。

一、インマヌエルの存在

イザヤの預言はこうです。おとめ、つまり彼の妻がみごもり、やがて男の子を産み、その子が物心つく前に、スリヤ・エフライム連合軍は敗れ、イスラエル王国は生き残るから、恐れるなと。この預言は重層的で、究極的にはやがて生まれる救い主についてのものです。〈その名はインマヌエルととなえられる〉。これをマタイは「これは、『神われらと共にいます』という意味である」（マタイ1・23）と説明しています。これは救い主にインマヌエルという名前が付けられるということではなく、インマヌエル「神われらと共にいます」という存在になって現れ、そのように地上を生きて下さるということです。実際のところ主を受け入れたら、神が共におられることが腹でわかってきます。イエス様が神でありながら人となって生まれて下さった目的は、私たちと共にいて下さるためでした。主は十字架にかかって私たちの罪を贖って、救いを完成し、復活して天に昇られましたが、聖霊という見えない形で私たちと共にいて下さいます。天上にだけおられるのでも、教会堂にだけにおられるのでもなく、家庭、職場、買い物先、運転中、ありとあらゆる場所で主は共にいて下さいます。そして私たちをとおしてご自身をこの世に現し、共に働いて私たちの隣り人を救いに導こうとしておられるのです。そのためにこの世に生まれて下さり、この地上に来られました。しかも永遠に共にいて下さる神たるお方です。マタイ福音書は、インマヌエルで始まり、インマヌエルで終わると言われます。「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」（マタイ28・20）。この事実によって私たちは寄る辺のない不安や孤独を克服することがで

きるのです。

二、インマヌエルの生活

クリスマスとは、別な観点から言うと地球が天から救い主を受けた日です。これほどの歴史の大事件を、はじめは誰ひとり気づきませんでした。御使によって教えてもらわなければ人間には分からなかった事実です。イザヤは預言しました、〈見よ、おとめがみごもって男の子を産む〉と。この言葉を御使は8世紀後に引用し、マリヤの夫ヨセフに告げています。「彼女は男の子を産むであろう。その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである」(マタイ1・21)。救いというのは日常の言葉に直せば「人生の解決」ということになるでしょう。クリスマスとは、人生の解決をしてくださる方が天から来てくださった日です。生理的なプロセスとしては、主はマリヤの体内に聖霊によって宿り、月満ちて赤ちゃんとして生まれてくださいました。この方はやがて成長して30才のとき神の国を宣べ伝え、33才のとき十字架にかけられて死なれました。これによってイエス様は私たちの罪を取り除くことのできる道を開かれました。つまり人生に解決のあることを明らかにされたわけです。神の子は死ななければ私たちを救うことができなかったとは、実に痛ましいことです。

しかしここにはイエス様の復活のことも暗示されています。〈その名はインマヌエルととなえられる〉、主は復活して、より頼む者といつでも一緒にいてくださるようになると預言されているわけです。裏返せば、いつも共にいて下さるからには、死から甦ったことが大前提になるので、インマヌエル信仰はそれ自体が復活を証明していることになります。あらゆる証明の中で最も強力なものです。しかもあらゆるクリスチャンが自分の言葉と体験で証明することができる強みがあります。「そこでまた、彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼によって神に来る人々を、いつも救うことができるのである」(ヘブル7・25)。いつでもどこでも救い主であられるということです。

結論

私たちはイエス様を受け入れたという瞬間において救われましたが、その方が共にいて下さることをいつでも確認できることは継続的な救いです。私たちはインマヌエルの祝福について身をもって証しして行きましょう。

研究資料

（小平徳行）

この個所はキリストの処女降誕の預言であるが、この預言は、当時の具体的な危機的状況下でなされたものである。時はユダの王ヨタムが死にアハズが即位して間もなくのことで、ＢＣ734年と推定される。

テキスト

1　エルサレムを攻めたが勝つことができなかった　序文であり、物語全体を包括している。当時、アッスリヤの脅威にさらされ、圧政に苦しんでいたイスラエルとスリヤは、ユダと共に三国同盟を結んでアッスリヤから独立しようと計画した。ところがアハズがこれを拒否したため、スリヤとイスラエルの連合軍は、エルサレムに攻め上り、アハズを滅ぼそうとしたのである。

2　エフライム　イスラエル王国のこと。ヨセフの子から出た部族名であるが、初代の王ヤラベアムがエフライム人であったことから、イスラエルの代表名に用いられるようになった。

3　シャル・ヤシュブ　「残りの者は帰って来る」の意味で、神の徹底的なさばきと、その後の一方的な恩寵による救いを象徴している。イザヤはこの名を持つ息子を連れて王の前に立つことにより、彼のメッセージの中心を思い出させようとした。**布さらしの野へ行く大路に沿う上の池**　エルサレム城外の東側にあった。布をさらすためには大量の水を必要とし、ソーダと灰汁（あく）のため悪臭を伴うので、城外の水路で行われた。ここにギホンの泉と呼ばれる地下からの間欠泉があり、それが上の池と下の池に分かれて流れて行く。水の少ないエルサレムにとって籠城のために水源確保は絶対不可欠であった。アハズはその調査のために、ここに来ていたのであろう。

4　気をつけて、静かにし、恐れてはならない　これは旧約聖書を貫く重要なメッセージである。**気をつけて**「見守る」（〈ヘ〉シャーマル）から派生した語で「注意する」「心に留（と）める」の意味。つまり真の助けはどこからくるのかに意識を集中させよということ。**静かにし**「休む、横たわる」（〈ヘ〉シャーカト）から派生し、「落ち着く、静かにする、黙る」の意味（イザヤ30・15）で、神に絶対信頼を置くことによって与えられる心の平静さ、落ち着きを持つようにということ。**恐れてはならない**　この言葉の背後には、エジプト脱出時、絶対絶命の状況下で主

がモーセを通じて命じた言葉がある（出エジプト14・13）。イスラエル人は、これまでに、何度となく危機的な状況に直面しては、この言葉を聞いてきた。そしてその度に彼らは信仰の原点にかえり、生きて働かれる神に信頼するよう励まされたのである。

6 タビエルの子　だれのことかは分からない。

9 エフライムのかしらはサマリヤ、サマリヤのかしらはレマリヤの子である　この後には、次の言葉が続くことが予想される。「ユダのかしらはエルサレム、エルサレムのかしらはダビデの子（アハズ）、そしてダビデの子のかしらは主なる神である」。

11 しるしを求めよ　これは「神に信頼せよ」とほとんど同義であるといえる。主はアハズの信仰を励ますためにしるしを求めるよう命じた。**しるし**（ヘオース）は、あることが必ず成就することを証明する出来事。

12　アハズ王は主の命令を体（てい）よく断った。彼は直面している危機を克服するのに、神の助けを必要とせず、自力で解決できると考えていた。それはスリヤ・エフライムに対抗するためにアッスリヤと手を結ぶことであった。彼は申命記6・16から引用して、いかにも敬虔（けいけん）らしく断っているが、その背後には不信と罪を悔改めようとはしないかたくなな心があった。

14 おとめ（ヘアルマー）聖書では九回用いられているが、既婚女性の例は一つもない。これ以外に「処女」を表す言葉があるが、結婚した女性についても用いられている。ゆえに、この語が使われているのは、処女であることの強調のためであるといえる。また、この「おとめ」が誰（だれ）のことを指しているのかについては諸説あるが、特定できない。**インマヌエル**「神、われらと共にいます」の意味。この男の子の誕生は、神が保護者としてユダの国と共にいますことを意味する。この究極は神が人となられたこと（受肉）である。この預言は、イエスの奇跡的誕生（処女懐胎）において完全に成就した（マタイ1・22〜23）。

15〜16 凝乳と、蜂蜜　これは貴重な食物であるが、アッスリヤ軍によって国が荒廃し、農耕生活を営めなくなった結果である。

参考図書　鍋谷堯爾「イザヤ書」『新聖書注解・旧約3』（いのちのことば社）、樋口信平『イザヤ書Ⅲ注解［1］』（一粒社）、他。

3日　礼拝メッセージ例

聖　書　イザヤ7・1〜17
タイトル　すばらしい約束！（アドベント第1週）
暗唱聖句　見よ、おとめがみごもって男の子を産む。その名はインマヌエルととなえられる。　イザヤ7・14
目　標　困難の中にも共におられる神に信頼する者となる。

（松浦みち子）

導入

「あれっ？　いつもと様子がちがうな。」「そう、今日からクリスマスを待つアドベントが始まったのよ。」クリスマスツリーも素敵に飾られ、アドベントクランツの４本のろうそくの１本に火が灯りました。４本全部灯ったらクリスマスですよ。楽しみですね。さあ、みんなでクリスマスを迎える心の準備をしましょう。

大変な時代

いまから二七〇〇年ほど前のイスラエルの国の出来事です。この国は、信仰深いダビデ王によって国造りがされましたが、ソロモン王の死後、国は二つに分裂し、北イスラエル王国とエルサレムを首都とする南ユダ王国になってしまいました。かつて神様の祝福によって栄えた国がどうしてこのようなことになってしまったのでしょうか？　それは、まことの神様から目をそらせ、石や木で作った偶像を拝み、勝手なことばかりして国中に悪が満ちたため、神様のさばきが下されたのです。

国と国との争いが続く大変な時代に、預言者イザヤは神様のおことばを人々に伝えました。そのころ、南ユダ王国は隣の国々からはさみうちのように攻撃を受けることになったのです。人々はひそひそささやき合いました。「戦争になったらどうしよう！」「いつ攻めてくるのだろう？」怖くて怖くて、夜もろくろく眠れません。アハズ王の心も国中の人々の心も、森の木々が風に吹かれて揺れ動くように不安でいっぱいでした。

イザヤの預言

あわてふためくアハズ王のもとに神様は預言者イザヤを遣わしました。「イザヤ、あなたは息子シャル・ヤシャブと共に出て行ってアハズに会い、わたしの言葉を告げなさい」と。イザヤはさっそく出かけました。その時、アハズは戦争が始まって国が包囲されても水を確保できるよう水源地の視察に赴いていました。その貯水池の側

でイザヤは預言したのです。「気をつけて、静かにし、恐れてはならない」と励ましました。たとえ敵がエルサレムを攻めてきても、彼らは燃え残りのくすぶっている切り株のようなもので、まもなく力尽きてしまうからと。

なんと力強い励ましのおことばでしょう。神様はアハズ王に具体的に65年のうちに敵国は敗れ、消滅してしまうと約束し、それを信じないならば、あなたがたは立つことはできないとおっしゃいました。そして、神様はアハズ王に、この約束が確かであることを保証する「しるし」を求めるよう命じられました。ところがアハズは「わたしは、それを求めて、主を試みるようなことはしません」と、一見敬けんそうなことを言って、主の命令に従いませんでした。なぜならアハズは、連合軍が攻めてくることを知って、当時勢力を伸ばしていたアッスリヤに金銀の贈り物をして助けを求め、確約を得るところにこぎつけていたのです。アハズは見えない神様よりも、大国に依存する方が得だと考えていたのですね。

主みずからの一つのしるし

イザヤは、不信仰なアハズを非難し、「あなたは、人々にもどかしい思いをさせるだけでは足りず、神にももどかしい思いをさせるのか。神の約束の実現のしるしとして、主はみずから一つのしるしをあなたがたに与えられる」と預言しました。神様は、人々が暗い気持ちで悲しみ悩んでいるのをごらんになり、「見よ、おとめがみごもって男の子を産む。その名はインマヌエルととなえられる。」と言われたのです。人々は「えっ、なんだって！まだ結婚していない人から男の子が生まれる？」「その名は『インマヌエル』と呼ばれてね、神われらと共にいますという意味なんだって」。「それじゃあ、その子の誕生は、神様が私たちと一緒にいてくださるというしるしなんだね。うれしいね。」人々はとても喜びました。

イザヤが預言した男の赤ちゃんとは、誰(だれ)のことでしょう。イエス様のことです。イエス様の誕生は700年も前から預言され、時が満ちて実現されたのです。

私たちは明日のことさえわかりませんが、神様は遠い未来のこともちゃんとご存じです。約束を必ず実行して下さる神様は、あなたの将来についても計画を持って導いてくださる方です。主に従って歩んでいきましょう。

♪しゅにしたがうことは♪（こ改119、こ53、ホ87他）

聖書　イザヤ9・1〜7
テーマ　救い主誕生の預言

（金井信生）

序論

イザヤによって700年以上も前から預言されていたキリストの誕生は、神の救いのご計画の実現でした。

一、大いなる光の到来

イスラエルの国はソロモン王の後に、北王国イスラエルと南王国ユダに分かれました。以来、周辺の大国からの圧迫に苦しめられ、もともと四国ほどの大きさしかない国が、さらに領土を失っていきます。ついに北王国イスラエルはアッスリヤに滅ぼされ、住民は捕え移されてしまいました。

神の民が、今光を失って暗やみの中にいます。しかしイザヤは、神がご主権とあわれみをもって、救い主を送り、くびきから解放してくださることを預言します。

〈くびき〉は敵に負わせられていますが、もとは神の民が教えに聞き従わなかったからです。神の祝福よりも周辺の国々の繁栄をうらやみ、多くの偶像を導きいれました。その結果、虚栄や偶像礼拝のために重荷が加わり、自分から負わなくてもよいくびきを負ってきたのです。

ですから、大いなる光とは、ただ敵が追い払われたり、領土や繁栄が取り戻されることだけではありません。神に背いて暗黒のうちにある人の心の中に差し込む、恵みの光、命の光です。神を見失っていた人々を、神に立ち帰る道に導く光です。

二、みどりごの誕生

救い主は、みどりごとしてこの世に来られます。英雄や超人ではありません。あえて無力な姿をもって来られるのは、人口の多さや領土の広さ、また経済的な繁栄や軍事力の大きさに目を奪われやすい私たちに、ただ神に頼る信仰を呼び起こさせるためです。実際にイエスは、ただみどりごとしてだけでなく、ベツレヘムの家畜小屋で飼い葉おけに生まれてくださいました。

イザヤの時代に前後して、北にはアッスリヤやバビロンが興りました。また南ではエジプトが盛衰を繰り返しながらも、常にイスラエルに影響を与えています。みな強大な力を誇り、イスラエルを踏みにじってきました。

歴代の王たちも、いつも周辺の国の顔色をうかがってきました。

しかし、神がひとたび乗り出されれば、人間の力は何ほどのこともありません。7章で「インマヌエル〈神われらと共にいます〉」と名付けられる男の子の誕生が預言されています。人の目に映るものではなく、神が共におられることとの平安と幸いを、みどりごの存在はわたしたちに教えています。

みどりごの名が四つ、ここに記されています。全知全能であり、自ら完結しておられる神の姿です。そしてこの神が私たちの父として責任と関わりを持とうとしておられることを示します。その目的は平和の実現です。

三、神の平和の実現

救い主が世に来られる大きな目的は、平和の実現です。まず、罪の赦しによって神と人の関係が回復されます。偶像やこれを慕う心が取り除かれ、神の恵みに満たされることによって、人と人との争いが鎮められていきます。ただイスラエル一国の救いと平和だけでなく、世界的な平和の実現です。世に来られたキリストは、上に立つお方ではなく、人々に仕え、一人一人を愛して声をかけられました。神と一人の関係が正しくされることによって、神の国がこの世に広がっていくためです。

神の救いの計画が実現されるのは、神ご自身の熱心があるからです。今も神は同じ熱心をもって私たちに臨んでおられます。

この熱心は、正義が曲げられていることへの義の怒りと、小さな者が失われ、滅ぼされそうになっていることへの深い愛からでています。神の熱心が働き出すとき、人間の不信や抵抗は吹き飛ばされてしまいます。まず私たちが神のご計画に立って、イエス・キリストを救い主と信じましょう。〈やみがなくなる〉、〈光栄を与えられる〉、〈喜びを大きくされ〉る、これらの言葉が実現していきます。

結論

神が私たちのために計画し、この世に生まれさせてくださった救い主キリストを信じましょう。

研究資料

（中島啓二）

神に背を向け、さばきを警告されても悔い改めようとせず、かえって「神をのろ」（8・21）った北イスラエルは、ついに「暗黒に追いやられ」（8・22）るに至った（大半の領土喪失と捕囚）。今やイザヤの子らの名に込められた預言のうちの一つ「マヘル・シャラル・ハシ・バズ（分捕物は素早く、獲物はさっと持ち去られる）」（8・1）が成就した。しかし「暗やみ」（2）の中にもイザヤは「大いなる光」（2）を見た。預言の一つが成就したならば、もう一つの「シャル・ヤシュブ（残りの者は帰って来る）」（7・3）も必ず成就すると確信していた彼に、神は「インマヌエル」（7・14）に続く、新しいメシヤ像（6〜7）をお示しになったのである。

テキスト

1　ゼブルンの地、ナフタリの地　これらの地（後述のメギドに該当）は、BC734〜732年のアッスリヤの侵入（列王下15・29他）で最大の打撃を受けた地域であった。すなわち反アッスリヤの動きを見せた北王国に対し、テグラテピレセルは、その地を含む北王国領土の大半をアッスリヤに併合し、一部住民を捕らえ移したのである。残されたのはサマリヤを中心とした丘陵地帯だけであり、アッスリヤに併合された地域は、ドル、ギルアデ、メギドという行政区に分けられた。そのそれぞれが **海に至る道、ヨルダンの向こうの地、異邦人のガリラヤ** に該当する。マタイは、イエスのその地域での宣教活動が、預言の成就であることを示している（4・12〜17）。

2　大いなる光　第一義的にはアッスリヤの圧政からの国土と民の解放を意味するが、預言が究極的に指し示すものは、言うまでもなく罪の支配からの人類の解放と、その解放をもたらす救い主である。「すべての人を照すまことの光があって、世にきた」（ヨハネ1・9）。**見た…照った**　預言者的完了と呼ばれ、預言書によく見られる。実際は将来のことであるが、預言者の目には既に起こったことのようにはっきり見えているのである。

4　くびき　発掘されたアッスリヤの碑文では、他国を征服することを「アシュル（アッスリヤの神）のくびきを課す」と表現している。**ミデアンの日**　10・26に「むかしミデアンびとをオレブの岩で撃たれた時」とあり、ギデオンと300人の精鋭による戦い（士師7章）を指すと

考えられる。それは人間の力によらず、神の力に徹底的により頼んだことから与えられた勝利であった。アッスリヤからの解放も、それが究極的に指し示す人類の救いも、全く神のみわざとして行われることなのである。

5　歩兵のはいたくつ　アッスリヤ兵は革製の編み上げ靴を装備していた。**血にまみれた衣**　ティル・バルシプ遺跡の壁画によると、アッスリヤの軍服は赤だったようである。その色と戦いの悲惨さの両方を表現しているのかもしれない。軍靴や軍服が排除されることは、神の勝利が完全な平和をもたらすことを象徴的に示している。

6　ひとりのみどりごがわれわれのために生まれた　「おとめがみごもって男の子を産む」（7・14）と預言されている男の子を指す。その子は他でもなく、「われわれのために」お生まれになるのである。**霊妙なる議士**　「不思議な助言者」（新改訳）。古代オリエントでは王に助言を与える議官がいたが、この方は王であり同時に助言者であられる。言い換えれば助言者を必要としない王である。**大能の神**　救い主が神ご自身であるという驚くべき預言。**とこしえの父**　「父」は神のその民に対する関係を指す（詩103・13参照）。救い主はご自身の民にとってあわれみに満ちた保護者であられる。**平和の君**　〔ヘ〕シャロームは平和の意で、健康、平安、健全、安全といった、欠けるところのない十全性を意味する。救い主はそのシャロームの状態を、神と人との間に樹立してくださる。するとそのシャロームが人と人との間、さらに個人の生活の中にも成立していくのである。

7　ダビデの位に座して　救い主はダビデの子孫として生まれるとエレミヤも預言した（23・5〜6）。その通りイエスは、ダビデの末裔（まつえい）であるヨセフの子として誕生された（マタイ1・1）。**万軍の主の熱心がこれをなされるのである**　人間的な目で現実を見るならば、イスラエルの回復、さらにそれが指し示す究極的な人類の救いは実現不可能に思える。しかし神の率先と神の熱心によってなされるならば、必ず成就するのである。それは人間的な知恵や国家間の同盟に期待し、神により頼むことなく滅びを招いたことへの反省と警句でもある。「神には、なんでもできないことはありません」（ルカ1・37）。

参考図書　注解書　鍋谷堯爾（新聖書注解・旧約3）、J. Oswalt (NICOT), J. Watts (Word). その他　The IVP Bible Background Commentary: OT.

聖　書	イザヤ9・1〜7
タイトル	救い主誕生の約束!(アドベント第2週)
暗唱聖句	ひとりのみどりごがわれわれのために生まれた。ひとりの男の子がわれわれに与えられた。　イザヤ9・6
目　標	私たちのために生まれた救い主キリストを信じる。

(松浦みち子)

導入

2本のろうそくに灯がともりました。先週イザヤの預言を学びましたね。おとめが産む子は、女の子ですか? 男の子ですか? また、その子の名は○○○○○○ととなえられました。何ととなえられるのでしょうか?

さて、今日は、預言されたその子のことをくわしく学びましょう。

大きな光

その子は男の子で、名は「インマヌエル」ととなえられると預言されましたね。しかし、イザヤが神様のお言葉を預言しても、南ユダ王国の王様や人々は、みことばに耳をかさず、神様に信頼しないで歩んでいました。その結果、人々は暗黒の中にいるような苦しい日々を送っていました。しかし、神様はお約束を必ず実現されるお方です。その「神共にいます」という約束のしるしとして特別なひとりの男の子が生まれるといわれたのです。

さらに、神様はどんな苦しみの状態であっても「大いなる光」が与えられることを約束されました。そして、その光によって人々は喜びが与えられ、苦難から解放されると預言されたのです。私たちも、悲しみや悩みや不安があり、真っ暗なトンネルの中をとぼとぼと歩いているような気持ちになるとき、神様が救いの光を照らしてくださるならどんなに力づけられることでしょう。

みどりごの誕生

神様の救いの光とは、神様が送ってくださる救い主を表しています。その救い主はどのようなお方なのでしょうか。「ひとりのみどりごがわれわれのために生まれた。ひとりの男の子がわれわれに与えられた」。イザヤが「インマヌエル」の預言の時にも言ったように、その救い主は「ひとりのみどりご」「ひとりの男の子」としてこの世に生まれます。「みどりご」とは、赤ちゃんのことです。ふつう「赤ちゃん」というように、生まれたばかりの子

を表現するのに赤色が使われますが、「みどり」は新芽のように若々しい児の意味で使われます（広辞苑）。

イザヤが預言した「ひとりのみどりご」は、私たちと同じ人間となってお生まれになりますが、その方は、四つの呼び名をもっておられ、それぞれにその働きを示しています。①霊妙なる議士（驚くべき指導者　新共同訳）、②大能の神（力ある神）、③とこしえの父（永遠の父）、④平和の君、という名がつけられます。みどりごの誕生の預言は、イスラエル人のためだけでなく、永遠に続く王国のためであり、全世界の人々の救い主として誕生されるイエス様のことを指し示す預言であったのです。

預言の成就のイエス様

イザヤは約700年以上も前、救い主イエス様の誕生を預言しました。クリスマスは、その預言が成就し、イエス様が赤ちゃんとして誕生されたことを確認し、心から感謝してお祝いする日です。なぜ救い主イエス様は赤ちゃんとして誕生されたのでしょうか？　イエス様は神であられましたが、自分を無にして赤ちゃんの姿となってこの世に来て下さったのです。それは、人間と同じ者になるためです（ピリピ2・6～7　新共同訳）。人として誕生してくださったことを通して、私たちと同じように歩まれました。ですから、人としての喜びも、悲しみも、悩みも何でもわかって下さるお方なのです。四つの呼び名をもっておられるイエス様は、①驚くべき指導者として、また不思議な助言者、カウンセラーとして私たちを導き、折にかなう助けを与えてくださるのです。みどりごイエス様は、②大能の神、力ある神として、天地創造の時からこの世界を統べ治めておられる神ご自身であられます。③「とこしえの父、永遠の父」と呼ばれるイエス様は、「アルパであり、オメガである。初めであり終りである」（黙示録21・6）お方です。私たちと日々共にいて、いつも変わりなく、守り、支えてくださる方です。④「平和の君」であられるイエス様は、ご自分の死を通して神と人、人と人の間にまことの平和をもたらすお方なのです。

このように素晴らしいイエス様が誕生してくださったことを心から感謝してクリスマスを待ち望みましょう。そして、あなたのことをいちばんよく知っていてくださるイエス様を信頼して祈りつつ歩みましょう。

♪神のお子のイエスさま♪（ふ74、ホ74）

聖書　マタイ1・18〜25
テーマ　ヨセフへの告知

序論

（金井信生）

キリストとは「救い主」という意味ですが、イエスはその教えや奇跡、あるいは十字架の死や復活によって救い主になられたのではなく、初めから救い主として生まれた方です。

一、救い主としての誕生

ヨセフは、婚約していたマリヤが身重であると聞いて、〈ひそかに離縁しようと決心〉しました。しかし、主の使はヨセフに、マリヤの〈胎内に宿っているものは聖霊によるのである〉ことを告げました。また、〈その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである〉とも告げます。

「イエス」という名前自体は、旧約のヨシュアを受け継ぐもので、「主は救い」という意味です。当時はありふれた名前の一つであり、救い主の到来を待ち望む思いを込めてつけられていました。

しかし、御使いの言葉は、親の願いを込めて生まれた者や、人の期待を受けて誰かが救い主になるのではなく、神の御計画の中で救い主がこの世に生まれることを示しています。

この章の初めの系図にあるように、人は誰でもアダム以来受け継がれてきた、命の系譜の中に生まれてきます。しかしキリストは聖霊によって、つまり神の特別な働きによって生まれてくるのです。ヨセフは旧約の信仰者たちにならい、自分の思いを置いて神のなさることに委ね従いました。

二、罪からの救い主

旧約時代から待ち望まれていた救い主は、大国に圧迫され、支配されることの多かったユダヤ人にとって、独立を回復する政治的な王として期待されていました。また、半分異邦人の血が入っているヘロデ王ではなく、ダビデ王の子孫が王となり、国中が神を畏れるようになる、宗教的な国家の確立を期待する人たちもいました。

しかし、主の使は救い主を〈おのれの民をそのもろもろの罪から救う者〉と呼んでいます。ユダヤ人は神の民と自称していても、神の目からは罪ある存在です。自分が神の前に清いのか汚れているのか、神との関係が正し

くあるのか、きちんと解決されていないのに、自分の思いを神の前に押し通そうとしていました。

もちろん、ユダヤ人だけに罪があるわけではありません。ユダヤ人は全世界の人々のモデルとして、まずこの神を知る民とされました。世界中のすべての人が、神に対して同じように罪がありますから、キリストは全人類に対して「罪から救う者」と呼ばれているのです。

また、系図の中にすでに人間の罪が見え隠れしていたように、普通の誕生では罪の中に初めから生まれているので、罪から救うことができません。聖霊による誕生は、私たちを罪から救うために、罪と無縁の方が罪の世に生まれてくるための特別の手段でした。

三、われらと共にいます

23節には、「イエス（主は救い）」と名づけられたのは、「その名はインマヌエル（神われらと共にいます）と呼ばれるであろう」とのイザヤ書の預言の成就であると説明しています。罪から救われた者は、神が共におられることを喜ぶ者へと変えられるのです。

罪とは、神を忘れて自分の思いに従う心そのものであり、またその心のままに歩む生き方です。その結果、過ちや傷を繰り返すだけでなく、神との関係が断ち切られています。

罪から救うために生まれたキリストは、やがて十字架にかかって全人類の罪を身に負って死なれます。これは神の愛と、完全な罪の赦（ゆる）しが世に示されるためでした。キリストが罪を赦し、救われるのは、私たちを神のもとに立ち帰らせ、神との正しい関係に歩ませるためです。

人口調査の対象にもされない羊飼いも、異邦人の博士たちも、そして病などのために「汚れた者」と扱われて、神の存在が遠かった者にも、キリストのその姿で、言葉で、行動で、神がわれらと共にいてくださることを現されました。そして、感謝と希望をもって神を賛美する者と変えられる救いを与えられました。この救いが今の私たちにも与えられているのです。

結論

私たちも、救い主として誕生されたキリストを信じ、罪が赦され、神の子としていただいた幸いを心から喜びましょう。

研究資料

（中島啓一）

テキスト

18　イエス・キリストの誕生の次第　「誕生」は〔ギ〕ゲネシス（起源、家系などの意も）。ちなみに1節の「系図」は「〔ギ〕ゲネシスの書（〔ギ〕ビブロス）」。その系図（1～17）の焦点であったイエスの誕生の詳細がここから語られる。**婚約**　いくつかの制限を除いては夫婦と同等に見なされる公式な関係。夫、妻という表現はそのため。その制限の一つは性的関係を結んではならないこと。一般に一年ほどの期間を経て正式な結婚へと進む。その間に女性が他の男性と関係を持てば姦淫（かんいん）と見なされた（申命記22・23以下）。**一緒にならない前に**　正式な結婚へと進む前。**聖霊によって身重になった**　神的存在が人間と関係を結ぶという異教的な概念はここにはない。1、18節で用いられている〔ギ〕ゲネシスには「創世記」の意もあり、そのことが象徴的に示すのは、神の創造のわざがマリヤの胎内になされたということである。天地創造のときと同じように、救いのわざなる新創造に際しても聖霊が働かれるのである。なお聖霊による受胎（18、20）の「～によって」を表す前置詞〔ギ〕エクは、1～17節の系図においても、「ボアズはルツによるオベデの父」（5）のように、その中に登場する四人の女性と共に用いられている。このことから、マタイは「ヨセフは聖霊によるイエスの父」と言いたかったのだと主張する注解者もいるが、あながち的外れでもないと思う。ヨセフがイエスの父というのは名ばかりのことでは決してない。ヨセフはその従順な信仰によって、イエスの単なる名目上の養父ではなく、彼にダビデの子孫としての地位を与える重要な役割を果たす、地上での父親とされたのである。

19　正しい人であったので、彼女のことが公けになることを好まず　「正しい」（〔ギ〕ディカイオス）は律法に対する正しい態度を指す語。律法に忠実であろうとすれば、マリヤの姦淫の容疑を世に明かし、彼女に裁きと処罰を受けさせねばならない（石打ちの刑。ただし当時それほど厳格には適用されていなかったようである）。ヨセフはマリヤをさらし者にしたくなかった。とはいえ明らかに有罪と思われるマリヤを妻に迎えるならば義が通らない。その葛藤の中で到達した答が、**ひそかに離縁**　すること。マリヤの同意さえあれば一人の証人の前で公式に

離縁することが可能であった。このようなヨセフの葛藤(かっとう)の姿は、律法に基づく神の前での正しさと、慈しみに富んだ隣人に対する優しさとを同時に示すものであった。

20 ダビデの子ヨセフ　新約でダビデの子という表現がイエス以外に用いられるのはここだけである。

21 その名をイエスと名づけなさい　イエス〔ギ〕イエースース）は、〔ヘ〕イェシュア（ヨシュアの短縮形）のギリシャ語読み。**おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となる**　その名は「主は救い」の意。救い主に対する当時の一般的な期待は、政治的な救いであったが、イエスがもたらす救いは「もろもろの罪から」の救いなのである。

22 主が預言者によって言われたことの成就するため　神が預言者を通して語られた救いの計画の成就として、救い主は誕生する。続く節はイザヤ7・14の引用。メシヤ預言には、それが第一義的に指し示すもの（ここでは、アハズに語られた当座の救い）と、究極的に指し示すものとがある。その究極の約束が、今や成就するのである。

23 おとめがみごもって　〔ギ〕パルセノスは「処女」の意だが、イザヤ書の〔ヘ〕アルマは「若い女性」の意。よってイザヤの預言は処女降誕を意味するのではないと主張する者もあるが、その預言の究極の意味での成就を記すこの個所で〔ギ〕パルセノスが用いられ、天使を通してその受胎が聖霊によるものと断言され（18、20）、さらにマリヤも「まだ夫がありません（直訳は、男の人を知りません）」（ルカ1・34）と語ることなどを総合するときに、マリヤの処女懐胎は、聖書全体がはっきりと指し示すものであると受け止めるのは当然である。**インマヌエル**　個人的な名ではなく、その役割を示す称号的なもの。神の御子が人となることによって「神われらと共にいます」という主の臨在が実現し、イエスの名が指し示す主の救いが実現に至るのである。最初の章からインマヌエル（神の臨在）を語るこの福音書が、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいるのである」（28・20）という臨在の宣言で締めくくられるのは偶然ではない。

25 子が生れるまでは、彼女を知ることはなかった　「知る」は性的関係を表す表現。このことは処女降誕の事実をさらに疑いないものとする。

参考図書　注解書　D. A. Hagner (Word), D. Hill (New Century Bible), 増田誉雄（新聖書注解）。その他　The IVP Bible Background Commentary: NT

12月

17日　礼拝メッセージ例

聖　書　マタイ1・18～25
タイトル　わたしを救って下さるイエス様
暗唱聖句　彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである。　マタイ1・21
目　標　救い主として誕生されたキリストにより、罪赦(ゆる)され、救いを頂く。

導入

（飯田勝彦）

ローソクに3つ目の火が灯されました。いよいよイエス様の誕生をお祝いするクリスマスが近づいてきました。次週は、クリスマス礼拝です。

皆さんの心は、イエス様をお迎えする準備はできていますか？　イエス様は、皆さんを幸せいっぱいにしたいと願っておられます。クリスマスを前にイエス様の誕生について見ておきましょう。

約束されたイエス様の誕生

本当に不思議なことですが、イエス様は生まれる何千年も前から生まれることが約束されていたのです。それは、神様の言葉である聖書に記されてあります。イエス様が誕生される約700年も前にイザヤという預言者がいました。そのイザヤが記した書物に「見よ、おとめがみごもって男の子を産む。その名をインマヌエルととなえられる」とあります。これは、イエス様のことです。

皆さんの中で「僕は700年も前から生まれることがすでに決まっていたよ」という人がいますか？　イエス様は不思議な方ですよね。

神様は、アダムとエバが犯した罪によって苦しむ私たちを救いたいと願い、イエスという人間の姿となってこの地上に、約束の通り来られたのです。神様は、遠く昔から私たちの救いのため、考えられないほどの計画を立てられました。その計画を実現するために、イエス様の誕生があるのです。

聖霊によるイエス様の誕生

イエス様はこの世に来られた時、最初から大人の姿で来られませんでした。イエス様は、マリヤのお腹から赤ちゃんとして誕生されました。ヨセフとマリヤが婚約をしていたとき、ヨセフはマリヤから「ヨセフさん、わたし子どもを授かりました」と聞きます。ヨサフはびっくりしたに違いありません。

当時は、結婚していない者たちに子どもが与えられることは、罪とされていました。その罪の罰は非常に重いものでした。

「どうしよう。これではマリヤがかわいそうだ」

ヨセフは考え苦しんだゆえに、婚約を取り消し、静かにマリヤと分かれることを決意しました。

しかし、そんな中、ヨセフの夢に天使が現れて言いました。「ヨセフ、恐れないで妻マリヤを迎え入れなさい。マリヤは、聖霊によって身ごもったのです」。ヨセフは、天使の声を聞いてマリヤに宿った子どもは、神様が与えて下さったと信じました。そして、マリヤを妻として迎え入れたのです。イエス様は、人間の力ではなく、神様の不思議な力である聖霊によるものでした。

私たちを救うイエス様の誕生

ヨセフに語られた天使の言葉には続きがあります。「その子を、イエスを名付けなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである」。

イエス様は、この地上にしっかりとした目的をもって誕生されました。それは、罪に苦しむ多くの人々を救うためでした。では、罪に苦しむ人々とは誰(だれ)のことでしょうか。皆さんには関係のないことでしょうか。いいえ、イエス様は、あなたを救うために誕生されたのです。

私たち人間は、生まれた時からすでに罪を抱えています。罪とは「神様に逆らうもの」です。私たちは神様によって造られ神様に愛されている存在です。ですから、神様につながっていなければ幸せになることはできません。でも、罪は神様と私たちのつながりを壊します。もし、神様に心がつながっていなければ、良いことも悪いことも分からなくなってしまいます。そして、罪に心が支配され、自分だけではなく周りの人たちを傷つけてしまうことになるのです。

まとめ

私たちは、みんな恐ろしい罪から救われなければなりません。私たちを完全に救ってくださるのは、イエス様しかおられません。私たちを救うためにこの世に誕生されたイエス様を信じましょう。

♪さあ　イエスさまをしんじましょう♪（ホ60）

聖書　マタイ2・1〜12
テーマ　東方の博士たち

（金井信生）

序論

キリストの誕生を知って、お会いするために東の国から博士たちが訪ねてきました。彼らはキリストを王として迎え、お従いする思いをもってきています。

一、キリストを拝むために

博士たちは、一つの不思議な星を見て、ユダヤの国に新しい王が生まれたことを知りました。そしてエルサレムに来て尋ねたときに、〈そのかたを拝みにきました〉と、目的をはっきり告げています。ただ見たい、知りたいという思いではなく、「拝む」ためです。

キリストは〈ユダヤ人の王としてお生れになったかた〉ですが、ユダヤ人だけではなく世界の救い主です。博士たちは、世界の救い主、自分の救い主を探し求めて、遠くまで時間もお金も費やしてやってきました。これまで自分たちの神を拝んでいても、多くの学問を身に着けても、財産を得ても満たされない思いをいだいていたからです。

当時、ユダヤの国を治めていたのはヘロデ王です。彼らも救い主がやがて来られることを信じ、祈り待ち望んでいたはずです。しかし、ヘロデ王もエルサレムの人々も、博士たちの言葉に不安をいだきました。ヘロデにとっては自分の王位がおびやかされる不安であり、町の人たちは王位をめぐる争いにまきこまれる心配です。どちらも今手にしている安定を失いたくないという恐れです。

二、キリストを拝み、ささげた

博士たちはベツレヘムにむかい、幼な子イエスを王として拝み、宝の箱を開けて、贈り物をささげました。

まだすばらしい教えを説くわけでもなく、驚くような奇跡を行うこともない幼な子の前に、どうして博士たちは高価な物を献げたのでしょうか。それは、何もかも整った中に生まれ育つのではなく、不足だらけで苦しみばかり多い生涯を送られようとする姿に、この方こそまことの救い主であると認めたからです。

クリスマスにお生まれになったイエスの生涯は、苦しみの連続です。しかしイエスはこれを不満とされませんでした。むしろ、私たちの苦しみを負い、最後は十字架

につけられて殺される道に、自ら進んでくださいました。この世の考えは、人に与えることよりも自分が受けることを求め、救い主が来られたことよりも自分の持っているものを守ることの方が大事だと思います。イエスの生き方は、そういう考えとはまったく違う生き方です。栄光を捨てて世に降られた方だからこそ、学者たちは、救い主を認め、伏し拝みました。そして喜んで高価なものを惜しみなくささげました。

三、キリストに従うものに

博士たちは、ヘロデ王から戻って報告するように命じられていましたが、〈ヘロデのところに帰るな〉と、夢でみ告げを聞き、エルサレムに向かわずに別の道を通って帰っていきました。

イエスを王であるキリストとして拝んだ博士たちは、自分たちが献げたものより、もっとすばらしいプレゼントをもらいました。それは、神に愛され、見守られている平安であり、キリストに導かれて、真理に歩む新しい生き方です。

キリストに導かれ、従う新しい生き方は、自分の生涯に対する見方を変えます。〈黄金・乳香・没薬〉はいずれも一生涯を費やすほどの高価なものです。しかし、キリストの恵みをいただいたときに、宝物は自分のものにするためではなく、ささげるため、神様の御用に用いていただくためであったことがわかります。

ヘロデ王やエルサレムの人々のように、今持っているものを失わないようにしようと思うだけでは、不安が増すばかりです。むしろすべてを治め、すべてを知っておられる神様に委(ゆだ)ねることで平安を得ることができるのです。

博士たちは、自らを犠牲としてささげ、自己主張の争いの絶えないこの世に来てくださった救い主の前にひれ伏しました。そして自分に与えられているものを喜んで主にささげ、自分のためではなく、他の人のために用いる生き方に決心して進んでいきました。ささげる者を主は用い、喜びで満たし、さらに祝福してくださいます。

結論

私たちもキリストを心に王として迎え、神から与えられているものを喜んで献げ、主の導きに従いましょう。

研究資料

（中島啓一）

東方の博士たちの出来事は、救いがユダヤ人だけにでなく、全ての国民に注がれる恵みであることを示す。それは、神がアブラハムに対して約束されたことであり、さらに預言者たちを通して繰り返し語られたことであった。この場面には二人の王が登場する。この世の王ヘロデと、まことの王としてお生まれになったイエスである。自分の王位にしがみつき、まことの王を拒むヘロデと、まことの王の前にひれふす博士たち。この両者の対照的な姿が、この章の重要なポイントと言える。すなわち、この恵みをもたらす救い主を前にするとき、人は彼を受け入れるか否かで、自ずと二つに分けられるのである。

テキスト

1　ヘロデ王の代　ヘロデ大王は紀元前4年に没している。16節で「二歳以下の男の子を、ことごとく殺し」ていることから、イエスの誕生は紀元前5、6年頃と推測される。ちなみに西暦（紀元前〔BC〕キリスト以前、紀元〔AD〕主の年）は、ローマの神学者ディオニュシウスにより、キリストの誕生を基準にして6世紀に定められたが、当時の知識が限定的であったことなどから、実際には数年のずれが生じた。**ユダヤのベツレヘム**　エルサレムから約8キロ南。ダビデの故郷であり、「ダビデの町」（ルカ2・4）と呼ばれる。**東からきた博士たち**　「博士」（ギ マゴス）は後に魔術師の意になるが、その時代にはその意味はなく「賢者」の意であった。アラビヤ、ペルシャなど諸説あるが、大きなユダヤ人社会が形成されていたバビロンが有力である。ユダヤの宗教・文化が広く知られている地域であり、博士たちもその影響を受けていたのだろう。伝統的に3人とされるのは、贈り物が3種類であったことからの類推による。**エルサレムに着いて**　ユダヤの新しい王に会うのに、王宮のある都がふさわしいと博士たちが考えたのは、当然であろう。

2　ユダヤ人の王　マタイでは他に受難記事（27章）であざけりの意で用いられるのみ。ヘロデが4節で「キリストは…」と言い換えているように、預言に基づいて待望されてきた「救い主」を指す表現。ただし、当時の救い主に対する期待は政治的なものであり、その期待が外れたゆえに、受難におけるあざけりにつながっていくのである。**その星**　ハレー彗星（BC12年）であるとか、

794年に一度、金星と水星が魚座の中で接近する天文事象（BC7～6年）であるなどの説明がなされるが特定はできない。大切なことは、自然現象であれ、超自然的なことであれ、偶然ではなく神の導きによってなされたということである。**そのかたを拝みにきました**　「もろもろの王は彼の前にひれ伏し、もろもろの国民（くにたみ）は彼に仕えるように」（詩篇72・11）との預言の成就と言える。彼らの明快な態度は、次節以降の人々と極めて対照的である。

3　ヘロデ王は…不安を感じた　ヘロデはユダヤ人ではなくローマの後押しで王位を得たイドマヤ人であった。国民からは不人気であったゆえに、預言に基づく救い主の誕生は脅威であったろう。**エルサレムの人々もみな…**　民の不安はヘロデのそれとは異なり、王が残虐な行動を起こすのではないかという不安であったかもしれない。

4　祭司長たちと民の律法学者たち　彼らは旧約の預言に通じてはいたものの、それに対するふさわしい応答をすることができなかった。

5～6　ユダの地、ベツレヘムよ、おまえはユダの君たちの中で、決して最も小さいものではない　「あなたは…小さい者だが」（ミカ5・2）が「決して最も小さいものではない」となっている。預言の成就に伴い、本来の意図が前面に出てきたと解釈して良いだろう。**おまえの中からひとりの君が出て…**　サムエル下5・2の引用。

7～8　ヘロデはひそかに…わたしも拝みに行くから　イエス殺害の意志を抱き、そのために博士らを利用しようとする策略家ぶりが表れている。

9　彼らが東方で見た星が、彼らより先に進んで…その上にとどまった　星がどのように動いたかは具体的に想像しにくい。より大切なことは、彼らを救い主探訪の旅にいざなった主が、最後まで確かな御手をもって導かれたと言うことである。

11　ひれ伏して拝み…黄金・乳香・没薬などの贈り物をささげた　古代東方において、贈り物は服従と忠誠を示す行為であった。教父たちやルターは、三つの贈り物に、イエスの王権（黄金）、神性（乳香）、受難（没薬）の意味を見いだす。

12　夢で…み告げを受けたので…　一切は徹頭徹尾、神の摂理によって導かれた。主の計画はこの世の王でさえ妨げることはできないのである。

参考図書　12月17日分と同じ。

24日 礼拝メッセージ例

聖　書　マタイ2・1〜12
タイトル　王として生まれたかた
暗唱聖句　ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにおられますか。マタイ2・2
目　標　キリストを心に王として迎える。

導入

（後藤　真）

クリスマスおめでとうございます。クリスマスは、キリストのミサ（礼拝）ということばです。キリスト、イエス様を礼拝するのがクリスマスです。クリスマスにはお楽しみもたくさんありますが、それはおまけ。まずイエス様を礼拝することをいちばんにしたいと思います。

エルサレムにやってきた博士たち

「ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにおられますか。わたしたちは東の方でその星を見たので、そのかたを拝みにきました。」

遠い東の国の博士たちは、エルサレムにやってきて、そう尋ねました。エルサレムには王様の宮殿がありました。だから、新しく生まれた王様はエルサレムにいると思ったのです。

ところが、そのころイスラエルを治めていたヘロデ王は博士たちのことばを聞いて心配になりました。

「新しい王様だと…わたしの王様の位が危ない。見つけ出して何とかしなければならぬ。」

ヘロデは祭司長や律法学者たちを集めて、新しい王様について調べさせました。

「ヘロデ様。新しい王様はベツレヘムで生まれると、聖書に書いてあります。」

ヘロデは、博士たちに星の現れたときについて聞き、新しい王様を見つけたら知らせるように頼みました。

「わたしも行って新しい王様を拝みたいのだ。」

でも、ヘロデの本当の気持ちは違いました。新しい王様を見つけたら殺してしまおうと思っていたのです。

博士たちの礼拝

エルサレムを出た博士たちは、ベツレヘムをめざしました。東の方で見た星が博士たちを導きました。星はイエス様のいる家にとどまりました。

「ついに見つけたぞ。ここに新しい王様がおられる。」

博士たちは喜びでいっぱいになり、家の戸をたたきました。

「こんばんは、開けてください。」

マリヤが戸を開けてみるとそこには見たこともない外国の人たちがズラリとならんでいるではありませんか。マリヤはおどろいて聞きました。

「まあ。あなたがたのような立派な方がこんないなかの家に何のご用ですか」

「わたしたちは、東の国の博士です。」

「イスラエルの新しい王様を拝みに来たのです。」

と、博士たちは答えました。

王様の宮殿ではなくベツレヘムの小さな家の中に、王女様ではなくふつうのお母さんだったマリヤのそばにいたちいさな子ども、イエス様。博士たちは、このイエス様こそが新しい王様だと信じて疑いませんでした。博士たちは東の国では立派な位の人たちで、たくさんのおつきの人たちもいたでしょう。そんな博士たちが小さな子どものイエス様の前で、頭を床につけ、ひれ伏して拝んだのです。

「贈り物を持ってきました。」

と、博士たちは宝の箱を開けました。そこには黄金、乳香、没薬（もつやく）という三つの贈り物が入っていました。黄金はピカピカに輝く金。乳香はよい香りのする油、没薬はよい香りのする薬で、ミイラを作る時にも使われました。どれもとても値打ちのあるものです。王様に贈るのにふさわしいプレゼントです。

博士たちは夢でヘロデ王のところに戻るなと告げられたので、別の道を通って自分たちの国に帰りました。博士たちは、本当の王様はヘロデではなく、自分たちが礼拝したイエス様だとわかったのでしょう。

イエス様は王様

わたしたちは王様に命令することはしません。それよりも王様の気持ちを考えて従うのです。

イエス様はわたしたちの王様です。王様であるイエス様に、命令やお願いばかりしてはいけませんね。わたしたちは、イエス様のことばを心に留（と）め、イエス様の喜ぶことを考えて生活するのです。

今日はクリスマス（キリストの礼拝）。みんなでキリスト、イエス様を礼拝し、王としてお迎えしましょう。

♪もろびとこぞりて♪（こ28、こ改76、ホ30他）

聖　書　コロサイ3・15～17
テーマ　感謝の生活

序論

（石田高保）

今日は年末感謝の礼拝です。一年の終わりを感謝で締めくくることはクリスチャンにとってふさわしいことです。世の中では、年忘れと称して宴会が催されますが、私たちは神の良くして下さったことを忘れず、心に刻み、明日への希望とすることができます。これまで良くしてくださった神は、これからも良くしてくださるに違いないからです。

一、なぜ感謝するのか

この個所では、感謝しなさい、という言葉が三度使われています。事あるごとに神様に感謝することは、クリスチャンのライフスタイルであり、基本的な生活の姿勢です。神が私たちと結んで下さった救いの契約は、永遠に変わらぬ真実に貫かれています。言いかえれば、こっちが態度を変えたからといって、神様は決して態度を変えなさらないということです。きのうの神は今日の神であり、どこまでも真実をもって追い求めて下さる熱いお方なのです。「まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう」（詩篇23・6、新改訳）とあるとおりです。

私たちはこれまで大小を問わず、何度悩みの中を通ってきたことでしょう。アダムによって堕落した世界に生きている限り、生老病死と言われる苦しみはクリスチャンであるからといって免れるわけではありません。祈ったからといってすぐに悩みから解放されるとも限りません。しかしやがてそれが取り去られるか、こちらが悩みを克服したときに、解放の喜びに与（あずか）ります。過去の悩みを振り返って、共に戦って下さった神への感謝がこの個所に込められているのではないでしょうか。

二、神との関係を感謝する

神様が私たちに敵対することは一瞬たりともありません。私たちのすることなすことをなにもかも是認されるわけではありませんが、私たちの人格は途切れなく受け入れ続けておられます。罪を憎んで人を憎まずとあるように、神は私たちの悪い行いは憎まれますが、私たち自体を憎むことはなさいません。その意味で神の愛が自分に注がれ続けるのをせき止めることは誰（だれ）もできないので

す。その愛の泉が湧き上がるのを私たちは決して押さえつけることもできません。もし神様からにらまれているように感じるとしたら、それは大きな間違いです。自分を不必要に責めているか、自分で自分を赦していないのかもしれません。「もし、神がわたしたちの味方であるなら、誰(だれ)がわたしたちに敵し得ようか」(ローマ8・31)とあるように、主の十字架のゆえに神様との間に和解は完成しているのです。この大いなる事実のゆえに神様に感謝しましょう。

三、すべての事を感謝する

「すべての事について、感謝しなさい」(Ⅰテサロニケ5・18)とあるように、これを実行すれば私たちの霊は健やかになり、奮い立たせられます。「すべて」の中には大感謝もあり、ちょっとした感謝もあり、にわかには感謝しがたい出来事もあるでしょう。むしろちょっとした良い変化について感謝することが、ますます神により頼む心を育むのです。小さいと見えることに感謝すればするほど、ゆくゆくは「すべての事について感謝」することにつながってゆくのではないでしょうか。「すべて」とは例外なくという意味です。小さい変化を喜べない人は、大きな変化を期待することはできないのかもしれません。

さらなる感謝の達人は、まだ起きていない出来事について感謝してしまう人です。その最たるモデルはイエス様で、ラザロの墓の前で「父よ、わたしの願いをお聞き下さったことを感謝します」と祈っておられます(ヨハネ11・41)。もし何も起きなかったらどうしようなどと心配している気配は微塵もありません。すでに叶えられたと受け取っておられます。これは先取りの信仰とか、領収証の祈りとか言われるものです。そういうことは神の子だからできたので、私たち凡人にはできないなどと言ってはいけません。なぜなら主は「なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう」と私たちに断言しておられるからです(マルコ11・24)。原則としてイエス様にできたことは私たちにもできるというのが聖書的な信仰の基準です。

結論

年末にあたり、感謝であったことを書き出してはどうでしょうか。また家族や信仰の友と感謝を分かち合ってみましょう。きっと喜びは倍になることでしょう。

研究資料

（辻林和己）

コロサイ人への手紙の前半1章と2章は、主イエスによる救い、福音の内容、神様の愛、主イエスの恵みがどれほど大きなものであるかということ等が記されている。3章の前半（1～17節）で、パウロは主の恵みに応えてどのように生活するかを語る。1～4節は、「上にあるもの、すなわち天におられるキリストを求めること」、5～11節は「古き人を脱ぎ捨て、新しき人を着たこと」が語られている（ここでの「着る」は「性質を受け継ぐ」という意味がある）。

今回与えられた聖書個所は15～17節であるが、ここでは12節から読む。

テキスト

まで積極的に説く。 神に選ばれた者、聖なる、愛されている者　パウロはコロサイ教会の人たち（手紙の読者）に、主の恵みによって自分たちがどのような立場にされた者であるかを想起させている。**あわれみの心、…、寛容**　これらの五つの徳目は「御霊の実」である（ガラテヤ5・22～23、エペソ4・2参照）。

13　互いに忍びあい、…、ゆるし合いなさい　前節の五つの徳目に続いて、互いに忍び合うことと赦し合うことの二つが人間の相互関係の具体的徳目として勧められる。

14　愛は、すべてを完全に結ぶ帯である　12～13節で述べたすべての徳目の上に愛を加えることを勧める。パウロの理解によれば、愛（ギアガペー）は、倫理の基本原理であり、すべての道徳律の集約である（ローマ13・10、ガラテヤ5・14参照）。ここでは愛が、「身に着けた」ばかりの「衣服」を、一緒にまとめて結ぶ帯にたとえられている。前述の徳目が内住のキリスト（コロサイ1・27）とともに分与される愛によって結び合わされるのである。

15　キリストの平和　「平和（ギエイレネー）」は、「平安」とも訳される言葉。罪人であった私たちが、キリストによって罪赦され、神との和解をいただき神の愛のふところの中にいることができる。これはキリストによって与えられる「平和」であり「平安」である。**支配する**（ギブラビューオー）は元来、「（審判員が）競技の審判をする」という意味の言葉。直訳すると「キリストの平和

にあなたがたの心の中で（感情や思いを）裁定させせよ」。そしてキリスト者はキリストによって神と和解しただけでなく、人間同士の間でも平和をつくり出すように召し出されている（マタイ5・9参照）。**召されて一体となる**　キリスト者として召し出され、新しくされた者は、キリストと一つにされている。

16　キリストの言葉　キリストによって語られた言葉、キリストについて語られた言葉を意味する。どちらにしても啓示された福音の言葉を示す。**あなたがたのうちに豊かに宿らせなさい**　宿す（ギ エノイケオー）は「中に住む、内在する」を意味する。ここでは主の言葉を心の奥深くに留める、内在させること。**互いに教えまた訓戒し**　これらは12〜15節の互いの赦しと信頼関係を前提としてできることである。**詩とさんびと霊の歌**　「詩（ギ プサルモス）」は賛美の詩、特に旧約聖書の詩篇の詩のこと。英語の psalm の語源。「さんび（ギ ヒュムノス）」は賛美歌、神をたたえる歌のこと。英語の hymn の語源。これらの三つの賛美の形態ははっきり区別することが難しい。詩篇の詩や新たに作られた賛美歌を指すのであろう。「これらの三つの用語は、クリスチャン賛美の多様さ、豊かさを示している」（N・T・ライト）。**神をほめたたえなさい**　ほめたたえる（ギ アドー）は「歌う、（神を賛美して）ほめ歌う」という意味。「心から神に向かって歌いなさい」（新改訳）。

17　本節は、今まで述べてきた2・6からの奨励のまとめのような個所。**主イエスの名によって**　何事を成すのも主イエスのためにする。**彼によって父なる神に感謝しなさい**　十字架と復活によって私たちの救いと神との和解を成して下さった主イエス。このお方、主イエスご自身が私たちの感謝の理由である。そして、私たちはこのお方を通して父なる神に感謝をささげることができる。

この後の3・18〜4・1では、キリスト者の家庭における新しい生活がどのようなものであるかが語られていく。

参考図書　宇田進「コロサイ人への手紙」『新聖書注解』（いのちのことば社）、N・T・ライト「コロサイ人への手紙」『ティンデル聖書注解』（いのちのことば社）他

31日　礼拝メッセージ例

聖　書　コロサイ３・15～17
タイトル　感謝の生活
暗唱聖句　感謝して心から神をほめたたえなさい。　コロサイ３・16
目　標　キリストにより感謝と賛美に満ちた生活をする。

（後藤　真）

導入

今日は一年の終わり、最後の日です。楽しかったこと、がんばったこと、しかられたこと、失敗したこと、うまくできたこと。いろいろなことがありましたね。この一年を感謝の気持ち終わることができたらすばらしいなあと思います。

おたがいに感謝

感謝というのは、「ありがとう」の気持ちを表すことです。心の中で思っているだけではなく「ありがとう」とことばで言ったり、行いで表したりすることです。では、わたしたちはだれに感謝するのでしょうか。まず教会に来ているわたしたちお互いです。

わたしたちは、イエス様に愛され、イエス様に選ばれたお互いです。イエス様にしていただいたように、愛しあい、ゆるしあうように言われています。ひとりだけでイエス様を信じていても愛しあうとかゆるしあうとかいうことはよくわかりません。愛しあえる人やゆるしあえる仲間がいるからイエス様の愛とゆるしがよく分かるようになるのです。

「いつもお祈りしてくれてありがとう」
「助けてくれてありがとう」
「いっしょに教会学校にきてくれてありがとう」

そんなふうにお互いに感謝してみましょう。イエス様の愛がもっともっと分かるようになりますよ。

感謝の礼拝

わたしたちお互いが感謝できるのは、神様がいてくださるからです。神様に感謝することも忘れてはなりません。神様に感謝するのにはいろいろなやり方がありますが、今日の聖書では、神様に賛美をささげ、礼拝して感謝することが教えられています。

礼拝なんてめんどうだなあ。牧師先生の話が長いから退屈だなあ、なんて思うことはありませんか。でも礼拝は神様に感謝をあらわすのにとてもいいチャンスです。

なぜなら礼拝は、他のことを考えずにただ神様のことだけ考えることができる時間だからです。

イエス様はわたしたちのために十字架にかかってくださいました。いのちまで捨ててくださったのです。神様はひとり子イエス様を十字架にかけてまでわたしたちを愛してくださったのです。どんなに感謝しても足りないくらいの愛をいただいているのです。

それなのに、わたしたちはそれほど神様やイエス様に感謝することがありません。ふだんは学校の勉強や宿題が忙しかったり、動画を見たりゲームをしたりする方が楽しかったりして、神様のこともイエス様のことも忘れてしまうのです。でも礼拝の時間は、神様に集中できる時間です。

心から賛美を歌ってみましょう。牧師先生のお話も一生懸命聞いてみましょう。神様のこと、イエス様のことだけを思って礼拝してみましょう。神様への感謝が心にあふれてくるでしょう。

すべてのことに感謝

今年一年を思い出してみたとき、自分だけの力でしたことは何もないなあと思います。わたしたちが生きていることこの世界はすべて神様が造られたものであり、わたしたちが何をするのにも神様なしではできないということを忘れてはいけないと思います。

「感謝できることがあったら感謝しよう」

というのはよい心がけです。でももっとよい心がけは、

「どんなことにも感謝できることを見つけよう」

ということです。感謝をすることは、特別なことではなくて、イエス様を信じている人のふだんからの生きかたなのです。

一年の終わりです。教会の人に感謝したいこと、家族や学校の友だちに感謝したいこと。いろんな感謝を見つけてください。そして「ありがとう」と言ってみてください。そして神様への感謝もたくさんさがしてください。いつものお祈りでは「お願い」が多いかもしれません。でも今日は、ただ神様に感謝するだけのお祈りをしてみるのもいいかもしれません。

来年も感謝いっぱいで過ごせるように、「ありがとう」とたくさん言えますように！

♪両手いっぱいの愛♪（ＰＷ13、ホ146、イン41他）

牧羊ひろば

名古屋教会　教会学校

名古屋教会は、日本イエス・キリスト教団が重要都市開拓伝道の目標を掲げ、仙台、広島、小倉、名古屋と開拓伝道を進めてできた教会です。一九六九年８月に高橋俊作牧師が放出教会より赴任され、７年８か月奉仕された後、一九七七年３月末に２代目牧師として松浦牧師夫妻が赴任されました。それ以来、今日まで40年間にわたる地道な開拓伝道が続けられてきました。開拓伝道の始まりは４軒長屋の１室でした。それから、時間制貸ルーム、戸建てのクリーニング店を改装した礼拝堂などを経て、二〇〇九年に現礼拝堂を持つことができました。創立48年の小さな群れの教会学校の働きと現状をご報告させていただきます。

「主は言われる、わたしがあなたがたに対していだいている計画はわたしが知っている。それは災を与えようというのではなく、平安を与えようとするものであり、あなたがたに将来を与え、希望を与えようとするものである。」（エレミヤ29・11）

「わたしの小羊を養いなさい。」（ヨハネ21・15）

夏期学校（お泊まり会）の様子

●過去から学ぶこと

遣わされた当初、教会学校の子どもはゼロでしたが、神様は私たちにご計画を持っておられるお方だと信じ

て、さまざまな取り組みをいたしました。近くの公園での青空教会学校、天幕伝道による集会、幼稚園・小学校の校門前のチラシ配布、分校による地域伝道など。さいわいなことに、松浦牧師が赴任した当時は、地方からの大学生が教会学校の働きを担い、支えてくださり、若さ溢れる奉仕によって、数においても、教会学校の活動内容においても充実した働きが繰り広げられました。ゼロだった教会学校の子どもたちも20人、30人と集まるようになり、クリスマスに用意するプレゼントが100を超すというような懐かしい思い出もあります。そのような大学生の中から、二人の献身者が起こされ、牧師として奉仕されるようになりました。また、学びを終えて、地方に帰られた方の中には、忠実な信徒として教会学校の教師として活躍されたり、教会役員として奉仕される方もあり、主の御名を崇めています。40年以上も一つの教会で奉仕させていただくことは、一人の人の誕生から成長過程、成人後の働きなど、目に見えない神様のわざを可視化して体験させていただけますので、いろいろと教えられることが多くあります。そのような体験に基づき、「わたしたちの知るところは、今は一部分にすぎない。しかしその時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであろう。」（Iコリント13・12）とのみことばの励ましを受け、現状に一喜一憂することなく、一人の魂を愛して、祈り続け、忠実に主に仕えることが大切であると教えられています。

花の日…集合写真

●現状（1）　通常の教会学校

教会学校教師が病気や様々な事情でできなくなり、現状は松浦みち子師が担当しています。クリスチャンホー

ムの子どもたちが10名ほど集まっています。親と一緒に来ますので、牧師の説教と同時に、別の部屋で子どもと礼拝をしています。大人の礼拝は1階、子どもたちは2階の部屋です。子どもたちの生活に即したみことばの説き明かしをしています。年齢にばらつきがあるので、お母さんにも助けていただいています。

奉仕（聖書朗読）

子どもの礼拝は、まず賛美と祈りの後、その日の聖書の個所を、高学年の子どもが前に出て読みます。読み終わると、その聖句の中から、質問をして、読んだみことばに注目させます。たとえば、「サマリヤの女」のお話しの場面だとすると、「その日は暑い日でしたか、寒い日でしたか？」、「読んだ聖書に出てくる人は、男の人ですか、女の人ですか？」など次々質問して聖句に注目させます。幼い子どもも質問されることがわかっているので、よく聞いています。その聖書の個所の一句を暗唱し、お話を始めます。そして、聞いたみことばが、子どもたちの日々の生活の血となり肉となるように心がけてみことばを語るようにしています。お話しが終わるとみことばノートに暗唱聖句を書き写し、豆カードを貼って終わります。献金の歌が始まると1階に下りてきて、献金をささげ、頌栄の前奏が始まると子どもたちは講壇の前に整列し、牧師からの祝祷を受けます。

●現状（2） 教会学校行事

1月　かるた大会、成人の祝福祈祷
3月　卒園、卒業を祝う会
4月　イースター礼拝、入園、入学を祝う会
5月　母の日行事　プレゼント作り
6月　花の日　病院訪問や施設の方の訪問

（子どもの作文　二〇一七年の例）

増子記念病院のみなさん、こんにちは。ぼくたちは、この病院の近くの名古屋教会に通っているものです。ぼくたちは毎年、６月第二日曜日を「花の日」とし、この病院を訪問しています。突然ですが、看護師という仕事は大変ですか？　ぼくは大変だと思います。どうしてかというと、何百人もの患者さんのことを助けたり、手伝ったりしているからです。ぼくはそんな看護師さんを尊敬しています。看護師さんや病院で働く人たちのおかげで、命が助かったり、勇気をもらったりして、患者さんたちはうれしいと思います。ぼくは将来、看護師さんや病院の先生のような人を助けて、喜んでもらえる職業につきたいと思います。これからも大事なお仕事をがんばってください。二〇一七年６月11日　日本イエス・キリスト教団名古屋教会教会学校」

花の日の様子…花束を渡す

ナスカレーつくり

7月、8月　キャンプ（お泊り会）、東海地区合同小学生キャンプ、教区中高生バイブルキャンプなど。
9月、10月　振起日礼拝、遠足など
11月　収穫感謝礼拝、たくわん作り（大根掘りも含め大根を干し、教会の昼食時に食べるたくわんを樽に漬け込む作業）。

子どもたちとたくわんを樽に漬け込む作業

12月　こどもクリスマス（キャンドルサービス、お食事会、工作など）
「おほしがひかる」の賛美の時には、工作上手な子の特製のぴかぴかと共に賛美します。

クリスマス…賛美の様子、作品「ぴかぴか」

●現状（3）

洗礼式は、基本的には浸礼です。小学生、中学生、高校生が受洗の恵みにあずかります。それらの子どもはある者は大学、就職で名古屋を離れますが、ある者は教会に留まりつづけて教会員として、聖書朗読、その他の奉仕にあたってくれています。将来、子どもたちの中から教会学校奉仕者が起こされ、直接献身者が起こされるこ

とを信じ祈っています。毎月第一礼拝後のグループ祈祷会では、子どもたちのため名前を挙げて祈り、神様のなされる業を期待して歩んでいる現状です。

（松浦みち子）

洗礼式

ナスの収穫

大根収穫

カリキュラム（二〇一七年 十月〜十二月）

神を信じる生涯

イザヤ40・26

●イスラエルの指導者

	行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
10月1日		ギデオンの召命	士師6・7〜16	同12節
8日		サムソン	士師16・4〜6、15〜22	同17節

●ノア・族長

	行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
10月15日		岩を土台とする生涯	マタイ7・24〜27	同24節
22日		四つの種	マタイ13・1〜9、18〜23	同8節
29日		七たびを七十倍するまで	マタイ18・21〜35	同35節
11月5日		婚宴への招き	マタイ22・1〜14	同4節
12日		主の再臨に備える	マタイ25・1〜13	同13節
19日		タラントの譬	マタイ25・14〜30	同21節

●キリストのみわざ

	行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
11月26日	収穫感謝	日々の糧を与える神	詩篇145・8〜16	同15節
12月3日	アドベント	インマヌエル預言	イザヤ7・1〜17	同14節
10日		救い主誕生の預言	イザヤ9・1〜7	同6節
17日		ヨセフへの告知	マタイ1・18〜25	同21節
24日	クリスマス	東方の博士たち	マタイ2・1〜12	同2節

●年末年始

	行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
12月31日	年末感謝	感謝の生活	コロサイ3・15〜17	同16節

『牧羊者』のご購読・ご利用について

＊分級用に、ワークＡ（幼稚科向け）、Ｂ（主に小学生１～３年生向け）、Ｃ（主に小学生４～６年生向け）を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各600円＋税でお送りします。
信徒局 教会教育室 ホームページ
http://cs.jccj.info/

＊ご注文は、日本イエス・キリスト教団（事務局）まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。
神戸市兵庫区塚本通３－３－19
電　話（078）575－5511
ＦＡＸ（078）575－6611

おわりに

『牧羊者』二〇一七年度第Ⅲ巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労苦に感謝いたします。

教師養成講座は飯田勝彦師に「教会学校教師として大切にし続けること」を執筆していただきました。「牧羊ひろば」は名古屋教会のＣＳを紹介していただきました。

今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

聖書講解　石田高保師　小泉　創師　高橋頼男師　金井信生師　福井文彦師
研究資料　宮澤清志師　小平徳行師　金井由嗣師　辻林和己師　中島啓一師
メッセージ例　松浦みち子師　和田　治師　飯田勝彦師　土屋開夫師　後藤　真師
ワーク（Ａ）　鎌野　幸師　吉田美穂師　佐川直実師
ワーク（Ｂ）　山下大喜師　三輪直子師　野勢かほる師　竹崎光則師　勝田幸恵師
ワーク（Ｃ）　上森恭子師　田中裕明師　後藤健一師
中高科へのヒント　後藤健一師　三輪正見師　石田高保師
子ども聖書日課　田中愛子師　金田ゆり師　小野淳子師
フラッシュカード　丹羽　遥姉　松浦あん姉　佐藤由香姉　後藤栄子師
み言葉カード・イラスト　丹羽　遥姉
ワープロ打ち込み　多田豊子師
校正　長田栄一師　加藤　清師　山田和幸師　中島啓一師

また、事務作業・発送の教団事務所の兄姉、印刷の松木共栄印刷、菱三印刷に心から感謝いたします。（中島啓一）

聖書教育教案誌　**牧羊者**
二〇一七年度　Ⅲ巻
二〇一七年一〇月一日発行
発行所
企画監修　日本イエス・キリスト教団
日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室
神戸市兵庫区塚本通三―三―一九
電　話（〇七八）五七五―五五一一
ＦＡＸ（〇七八）五七五―六六一一
印刷所　菱三印刷株式会社
電　話（〇七八）五七六―三九六一
＊日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み